

史跡和田岡古墳群

# 吉岡大塚古墳

第5次発掘調査報告書

2013

掛川市教育委員会

史跡和田岡古墳群

# 吉岡大塚古墳

第5次発掘調査報告書

2013

掛川市教育委員会



吉岡大塚古墳全景（南西から）



吉岡大塚古墳全景



吉岡大塚古墳全景（北西から）

# 例 言

1. 本書は、静岡県掛川市大字高田、吉岡に所在する吉岡大塚古墳の第5次調査の発掘調査報告書である。
2. 吉岡大塚古墳の第5次調査は、平成23年度に現地発掘調査を行い、同年度に部分的な整理調査、24年度に整理調査と報告書作成を行った。
3. 調査は、史跡和田岡古墳群の中の吉岡大塚古墳の史跡整備に必要な資料を得るための調査であり、国および静岡県の補助を得て、掛川市教育委員会が実施した。
4. 発掘作業ならびに整理作業には、次の方々の参加を得た。(順不同)  
寺沢巧、福田一郎、福田貞夫、山崎富士男、藤田弘、渥美憲鋭、長尾秀雄、鈴木良晴、藤田房幸、藤田理恵、溝口玉緒、山崎シズ、鈴木辰江、多賀一美、萩田ふみ、野中きみ子、太田敏子、榛葉豊子、徳川浩、早乙女のぞみ
5. 現地調査ならびに整理調査にあたっては、吉岡大塚古墳発掘調査指導委員である大塚初重氏(明治大学名誉教授)、向坂鋼二氏(掛川市文化財保護審議会委員)、滝沢誠氏(平成23年度国立大学法人静岡大学人文学部教授、24年度国立大学法人筑波大学人文社会系准教授)の指導を受けた。
6. 発掘調査ならびに報告書作成にあたり、以下の方々からご教示・ご協力をいただいた。記して感謝する。(順不同、敬称略)  
木村弘之、柴田稔、鈴木一有、鈴木敏則、田村隆太郎
7. 本書の執筆と編集は、井村広巳(掛川市教育委員会社会教育課文化財係)が行った。
8. 調査によって得られた資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

# 凡 例

1. 図中の座標値は世界測地系に基づき、方位は座標北、L = は標高である。
2. 遺物番号は、遺物の種別にかかわらず、連番を付している。
3. 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

# 目 次

巻頭図版

例言 凡例

第1章 地理的・歴史的環境 .....	1
第2章 調査の内容 .....	4
第3章 調査の成果 .....	9
第4章 行人塚古墳の出土遺物 .....	28
第5章 まとめ .....	30

出土遺物観察表

# 挿図目次

第1図	古墳の位置と周辺の古墳時代の遺跡分布図	2
第2図	トレンチ配置図	5
第3図	吉岡大塚古墳遺構全体図	7
第4図	第10トレンチ実測図(1)	10
第5図	第10トレンチ実測図(2)	11
第6図	第11トレンチ実測図	12
第7図	第12トレンチ実測図	14
第8図	第5次調査 出土遺物実測図(1)	16
第9図	第5次調査 出土遺物実測図(2)	17
第10図	第1次調査 出土遺物実測図	19
第11図	吉岡大塚古墳出土埴輪実測図(1)	20
第12図	吉岡大塚古墳出土埴輪実測図(2)	21
第13図	吉岡大塚古墳出土埴輪実測図(3)	22
第14図	吉岡大塚古墳出土埴輪実測図(4)	24
第15図	吉岡大塚古墳出土埴輪実測図(5)	25
第16図	浅間神社3号墳出土円筒埴輪実測図	26
第17図	浅間神社3号墳出土朝顔形円筒埴輪実測図	27
第18図	行人塚古墳出土遺物実測図	29

# 図版目次

## 巻頭図版

- 1 吉岡大塚古墳全景(南西から)
- 2 吉岡大塚古墳全景  
吉岡大塚古墳全景(北西から)

## 図版

- PL.1 全景(西から)
- PL.2 墳丘(南西から)  
墳丘(西から)
- PL.3 第10トレンチ 後円部西側完掘状況(西から)  
第10トレンチ 埴輪出土状況(西から)
- PL.4 第11トレンチ 前方部南西完掘状況(南から)  
第11トレンチ 前方部南西完掘状況(西から)
- PL.5 第12トレンチ くびれ部北側周溝完掘状況(北から)  
第12トレンチ くびれ部北側周溝完掘状況(西から)
- PL.6 第12トレンチ 周溝内集石検出状況(西から)  
第12トレンチ 周溝内集石断ち割り状況(西から)
- PL.7 吉岡大塚古墳出土遺物
- PL.8 行人塚古墳出土遺物

## 第1章 地理的・歴史的環境

### (1) 地理的環境

吉岡大塚古墳が所在する和田岡地区には、二級河川原野谷川により形成された河岸段丘があり、上位段丘面と下位段丘面に大きく分けられる。上位段丘面は、南北約1.7kmを測り、東西は今回報告する吉岡大塚古墳の北側あたりで最も幅が広くなり約800mを測る。段丘面は、北端が標高約66mを測り、南端が標高約52mと南北で約14mの高低差がある。下位段丘面は、南北約1.8km、東西は瓢塚古墳の北側あたりに最大幅があり、約650mを測る。この段丘面は、北端が標高約55mを測り、南端が標高約40mと、南北で15mほどの高低差がある。

上位段丘面、下位段丘面には、旧石器時代以降の遺跡がほぼ全面と言ってよい密度で分布しているが、古墳時代の遺跡について、段丘の周辺も含めて概観する。

### (2) 歴史的環境

段丘面は、茶畑が広がっているほか、宅地や企業用地になったりしている。これらの土地利用をきっかけに今まで数多くの発掘調査を実施してきていて、少しずつ遺跡の状況が明らかになってきた。

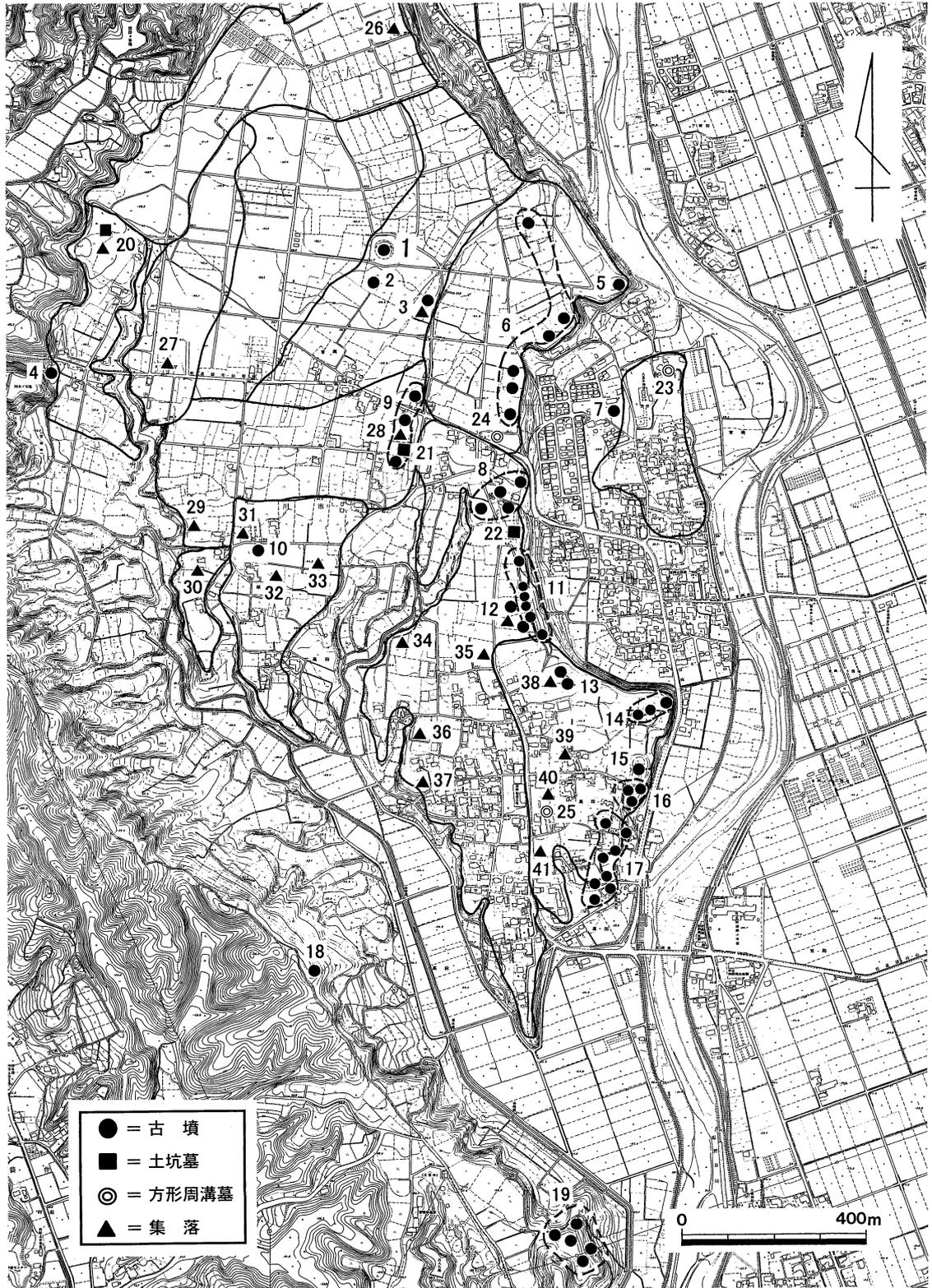
周辺の古墳時代の遺構・遺跡は、古墳、土坑墓、方形周溝墓、集落がある。

古墳は、史跡和田岡古墳群の吉岡大塚古墳、春林院古墳、行人塚古墳、瓢塚古墳、各和金塚古墳の5基のほかに、『掛川市遺跡地図』には、今坂古墳(4)、吉岡下ノ段古墳群(6)、宮脇行人塚古墳(7)、藤六古墳群(8)、吉岡原古墳群(9)、瀬戸山古墳(10)、東登口古墳群(11)、女高古墳群(14)、高田古墳群(16)、谷房ヶ谷古墳群(17)、高田古墳(18)、各和金塚古墳群(19)の記載がある。

現在確認できる古墳は、史跡和田岡古墳群の5基、東登口古墳群6基のうちの5基、谷房ヶ谷古墳群のうちの1基、各和金塚古墳群程度である。これとは逆に、地上から消えていた古墳が、発掘調査によって現れたものもある。

吉岡大塚古墳の南約100mから発見された高田上ノ段古墳(2)は、発見された周溝から直径約12mの円墳と推定され、築造時期は6世紀前半と考えられる。同じ高田上ノ段遺跡からは、もう1基円墳(3)が確認された。この古墳は、上位段丘面と下位段丘面の間の緩斜面から発見され、周溝から直径10.5mと推定され、中期中頃に位置づけられる。高田遺跡の北東隅に位置する藤六古墳群(8)の3号墳の推定位置から、小規模な古墳の周溝の可能性のある溝が検出された。推定される古墳の規模は、溝の内側下端間で直径5m前後と考えられる。東登口古墳群に隣接する高田遺跡(12)からは、円墳と方墳と考えられる周溝が検出された。円墳は、直径9mと推定される。方墳は、墳丘の規模が一辺約7.4m、9.5m×南北9m以上、南北8.6m以上×東西8.9m以上、東西7.2m以上×南北9.6m、東西15.2m以上×南北8.4m以上の合計5基である。これらの高田遺跡から発見された円墳・方墳は、周溝内の出土遺物から前期に位置づけられ、方墳の周溝が円墳の周溝を切っている状況が窺えた。この高田遺跡から発見された円墳・方墳の規模は、東西15.2m以上×南北8.4m以上の規模の方墳を除けば、同時期の方形周溝墓と変わりはなく今後検討を要する。行人塚古墳(13)の北側からは、確認面の幅5.8m、最大幅7.4mを測り、コーナーが直角に曲がる周溝が確認されていて、確認面での規模約18mの方墳と推定された。周溝内から弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が出土した。

土坑墓は、上位段丘の西端の今坂遺跡(20)、上位段丘の東側縁辺の吉岡原古墳群域内(9)、藤六古墳群に隣接する高田遺跡(22)から発見されている。



第1図 古墳の位置と周辺の古墳時代の遺跡分布図

- 1.吉岡大塚古墳 2.高田上ノ段古墳 3.高田上ノ段遺跡 4.今坂古墳 5.春林院古墳 6.吉岡下ノ段古墳群  
 7.宮脇行人塚古墳 8.藤六古墳群 9.吉岡原古墳群 10.瀬戸山古墳 11.東登口古墳群 12・22・34~37.高田遺跡  
 13.行人塚古墳 14.女高古墳群 15.瓢塚古墳 16.高田古墳群 17.谷房ヶ谷古墳群 18.高田古墳 19.各和金塚古墳群  
 20.今坂遺跡 21・28・29.吉岡原遺跡 23.林遺跡 24.吉岡下ノ段遺跡 25・38~41.女高I遺跡 26.東原遺跡  
 27.溝ノ口遺跡 30.瀬戸山II遺跡 31~33.瀬戸山I遺跡

今坂遺跡(20)からは、幅2.55m、長さ4.65mの規模の土坑墓が確認された。土坑墓は2段に掘り込まれ、下段は幅1.54m、長さ4.0m、深さ70cmの規模がある。2段に掘り込まれた長軸方向の壁際から切先を床に向けて立てかけたような状態の鉄剣が出土した。吉岡原古墳群域内(9)からは、3基の土坑墓が確認された。3基は、並列することも等間隔でもなく、長軸の方向も異なる。このうち1基は、確認面における規模が幅約1.3m、長さ約2.4mで2段に掘り込まれ、下段の縁に上面がほぼ平坦になるように面を揃えた礫が一周し、礫の上面を覆うように黄色粘土が貼られていた。土坑内からは、弥生後期～古墳前期と捉えられる土器の小片が出土しただけで、副葬品は全くなかった。高田遺跡(22)からは、これまでに11基の土坑墓が検出された。これらの土坑墓は、吉岡原古墳群域内で検出されたもの同様に、向きも間隔もばらばらである。平成元年度調査の6基のうち遺物が出土したのは2基で、SF04は、確認面での幅90cm、長さ約2mを測り、刀子が出土し、SF07は、確認面での幅40～50cm、長さ約1.9mを測り、鉄刀、刀子、鎌が出土した。24年度の調査で検出された土坑墓は、最大のものが確認面の幅60cm、長さ2.1m、最小のもので確認面の幅40cm、長さ1.3mの規模で、鉄刀、鉄鎌、刀子、鎌が副葬されていた。また、底面に礫が敷かれたものが1基あった。

これらの土坑墓は、鉄剣・鉄刀等の副葬品から中期に位置づけられる。

方形周溝墓は、沖積平野に立地する林遺跡(23)、下位段丘の縁辺の吉岡下ノ段遺跡(24)、下位段丘面の中央あたりの女高I遺跡(25)から検出されている。

林遺跡(23)からは2基が検出された。1基は、方台部の規模が一辺約9mを測り、もう1基は、方台部が8m×10mの規模と推定される。どちらも前期の方形周溝墓と考えられる。吉岡下ノ段遺跡(24)は、周溝が直角に折れるコーナー部分を検出したもので、周溝墓の規模は不明であるが、時期は前期と考えられる。女高I遺跡(25)は、方台部の規模が南北約8m、東西8m以上を測る1基を検出した。築造時期は前期で、中期まで祭祀が行われたと考えられる。

第1図に示した集落の大半は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものであり、中期に位置づけられるものは高田遺跡から検出された住居跡(35)、土坑(34)、女高I遺跡内から検出された住居跡(40)・(41)が挙げられるにすぎない。

このように、前期は弥生時代以来の集落や方形周溝墓、春林院古墳の存在が明らかになってきたが、中期のものは、古墳と土坑墓の存在が明らかになっている程度である。ようやく、近年の発掘調査によって、住居跡が高田遺跡と女高I遺跡から発見され、多量に土器が廃棄された土坑が高田遺跡から発見されるようになった。しかし、住居跡は、単独で1棟ずつ発見されただけで集落と呼べるものではなく、土器を廃棄した人物の生活の場も明らかではない。中期の集落の発見に今後の期待がかかる。

#### 参考文献

- 『高田上ノ段遺跡発掘調査報告書』 掛川市教育委員会 1986年
- 『高田上ノ段遺跡発掘調査報告書』 掛川市教育委員会 2011年
- 『藤六3号墳・高田遺跡発掘調査報告書』 掛川市教育委員会 1990年
- 『高田遺跡発掘調査概報』 掛川市教育委員会 1988年
- 『高田遺跡茶畑改植に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 掛川市教育委員会 2005年
- 『女高遺跡・行人塚古墳発掘調査報告書』 掛川市教育委員会 1990年
- 『今坂遺跡第6次調査 瀬戸山Ⅱ遺跡 高田遺跡第21次調査発掘調査報告書』 掛川市教育委員会 2009年
- 『吉岡原遺跡発掘調査概報』 掛川市教育委員会 1987年
- 『林遺跡発掘調査報告書』 掛川市教育委員会 1993年
- 『市内遺跡発掘調査報告書』 掛川市教育委員会 2008年
- 『春林院古墳の研究』 静岡大学人文学部考古学研究室 2011年

## 第2章 調査の内容

### (1) 吉岡大塚古墳の調査履歴

吉岡大塚古墳は、平成23年度を含めて5回の調査が実施されてきた。そこで、昭和54年度を第1次、平成19年度を第2次、20年度を第3次、21年度を第4次調査とし、今回報告する23年度を第5次調査とした。

ここでは、第1次から第4次調査までの概要を述べる。

第1次調査は、平板による墳丘測量とトレンチによる確認調査であった。この調査により、葺石と埴輪を備え、後円部が直径40mの2段築成で全長55mの古墳であることが明らかになった。

第2次調査は、後円部南側に第1トレンチ、後円部東側に第2トレンチ、後円部北側に第3トレンチを設定して調査を行った。その結果、第1トレンチでは、上段墳丘の裾と幅約1.2mの段、底の幅約7mの周溝が把握できた。第2トレンチでは、上段墳丘の裾が確認され、裾から幅2m程の段が想定され、縁から傾いた埴輪が検出された。周溝は、底の幅約7mと考えられ、第1次調査で周溝の外側に存在するとされた外堤は確認されなかった。第3トレンチでは、上段の葺石はみられたが、裾は攪乱を受けていて、位置と高さは明確ではなかった。第1トレンチや第2トレンチに比べて幅広の約4mの平坦面が古墳築造当初から存在した段の可能性が高いことが明らかとなった。周溝は、溝底の幅約6mとされた。

第3次調査は、墳頂部トレンチ、後円部南側の第1トレンチ、後円部東側の第2トレンチ、後円部北側の第3トレンチ、後円部西側の第4トレンチ、前方部の第5トレンチの調査を行った。第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチは、第2次調査のトレンチを拡幅して調査を行った。墳頂部トレンチでは、全域から埴輪片が出土したが、細片がほとんどで出土レベルにも高低差があり、樹立の状況を知ることはできなかった。また、墳頂部の中央に地表からの深度80cmの近現代の掘り込みが確認されたが、主体部の掘り方等は全く確認されなかった。第1トレンチでは、標高63.3m付近で上段の葺石と段が検出された。段の幅は約1.3mで、段から樹立された状態の埴輪は検出されなかった。第2トレンチでは、幅約1.4mの段と上段葺石の縦方向の区画石列を検出した。段の縁からやや下方から2箇所の埴輪片の集中が検出されたが、埴輪の基底部がなく、原位置ではないと判断された。第3トレンチでは、上段の葺石の根石列と石を縦に一列に積み上げた区画石列を検出した。段は、上段葺石の根石列から幅4m付近まで緩やかに傾斜し、縁辺から集石と埴輪片の集中がみられた。第4トレンチでは、後円部と前方部が接する部分から散在する葺石が検出された。葺石の端から約1.5mの間は傾斜が緩やかで、標高が他の後円部の3方で検出された段の標高とほぼ合致することから、段の可能性があると考えられた。第5トレンチは、厚さ20cmほどの表土層下にほぼ水平に堆積する墳丘盛り土層が確認され、前端部が15cmほど高くなっていた。前方部の西側斜面から縦方向に石を据えた区画石の可能性のある石列を検出した。周溝は、深く攪乱を受けていて確認することはできなかった。

第4次調査は、後円部南側の第1トレンチ、後円部北側の第3トレンチ、北側くびれ部の第6トレンチ、前方部南前端部の第7トレンチ、前方部北側周溝外縁の第8トレンチの調査を行った。このうち、第1トレンチ、第3トレンチについては、これまでの調査で裾の位置が判然としないことから再度調査を行ったが、裾付近に明確な葺石は残存せず、水平な周溝底面から角度を変えて墳丘にいたる変換点が裾と考えられた。また、第3トレンチにおいては、幅広のテラス状のものが、古墳に伴う施設か後世の地崩れによるものか追求したところ、当初から他の部分の段より幅広い平坦面が存在したことが明らかになった。第6トレンチでは、裾に埴輪が樹立されていないことが明らかになった。第



8トレンチでは、周溝の形が従来考えられていた墳丘の形に沿う形状ではなく、熱気球形の周溝であることが確認された。墳頂部で実施した地中レーダーの結果、地表面から約50cm、1.5m前後、約2.2mから主体部の可能性のある反射がみられた。

## (2) 調査に至る経緯と目的

平成22年度に、昭和54年度、平成19～21年度にかけて実施した発掘調査の成果を整理して報告書にまとめた。この整理調査によって、吉岡大塚古墳を復元整備するための資料に不足があることが明らかとなったことから、補足調査を行うこととなった。

補足調査のポイントは、以下の3点である。

1点目は、後円部の東側の第2トレンチ、北側の第3トレンチで確認された後円部上段の葺石の縦方向の区画石が西側の上段葺石に存在するか確認を行う。

2点目は、前方部南側に設定した第7トレンチにおいて、裾の一端を確認したが、裾全体はさらに南側に及んでいることが確認された。そこで、復元整備を行うためには前方部南側端部の形状、規模等を把握することが必要であるため、調査を実施する。

3点目は、古墳北側のくびれ部の状況を確認するために第6トレンチを、前方部北側の周溝の状況を確認するために第8トレンチを設定し調査を行った。その結果、第6トレンチの北端の周溝底面の標高が60.9m、第8トレンチ南端の周溝の底面の標高が61.35mを測り、墳丘に近い第6トレンチの方が45cm深くなることが明らかとなった。第6トレンチと第8トレンチの間の状況が不明であるため、この間にトレンチを設定し、周溝の状況を探ることにした。

平成23年5月17日付けで、文化庁に「史跡の現状変更許可について（申請）」を行い、6月17日付けで文化庁から掛川市に「史跡和田岡古墳群の現状変更（発掘調査）について（通知）」があった。

## (3) 調査の方法と経過

後円部の西側斜面に設定したトレンチを第10トレンチ、前方部南側前端部に設定したトレンチを第11トレンチ、前方部北側周溝内に設定したトレンチを第12トレンチとした。

調査にあたっては、第2次調査時に設定した5m方眼のグリッドを使用して調査を行うことにした。グリッド名は、アルファベットと数字を組み合わせ、H-9区、J-11区等とし、グリッドの北西に位置する杭にグリッドを代表させた。

7月12日から作業を開始し、第11トレンチ、第10トレンチ、第12トレンチの順に掘削を開始した。9月20日、調査指導委員の先生方による1回目の現地指導を受けた。指導は、第10トレンチ西端の集石の調査方法、第11トレンチの調査内容の確認、第12トレンチの中央から検出された集石の調査方法が主要なものである。10月25日、調査指導委員の先生方による2回目の現地指導を受けた。

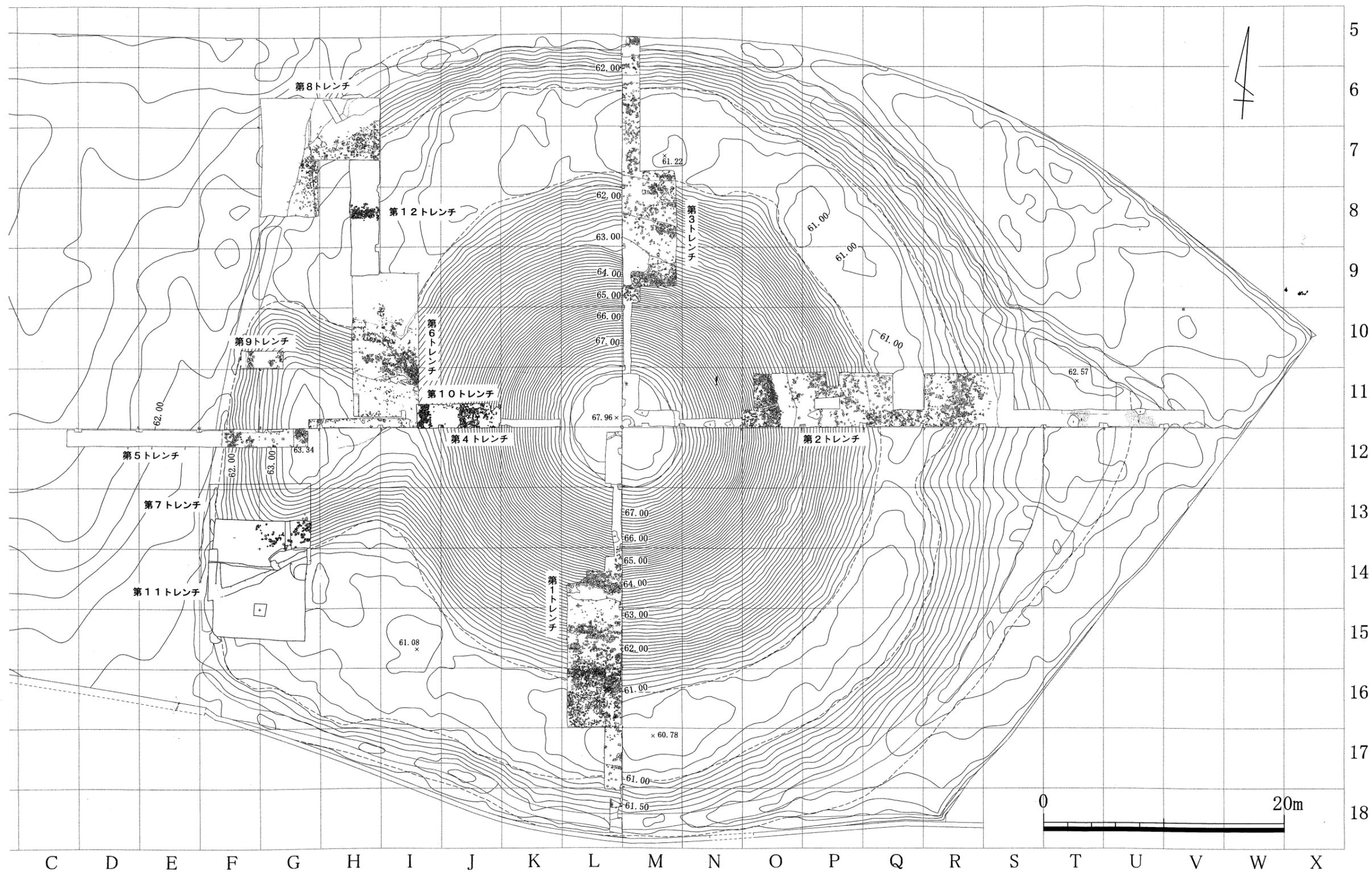
11月2日、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、すべてのトレンチを埋め戻して11月10日に発掘調査を終了した。

現地での図面作成は、遺構図を縮尺20分の1、微細図は縮尺10分の1とした。写真撮影は、6×7カメラ1台（プロニー白黒用）と35mmカメラ2台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。

### 参考文献

『吉岡大塚古墳測量調査報告書』 掛川市教育委員会 1980年

『史跡和田岡古墳群 吉岡大塚古墳 第2次・3次・4次発掘調査報告書』 掛川市教育委員会 2011年



第3図 吉岡大塚古墳遺構全体図

## 第3章 調査の成果

### (1) 遺構

第10トレンチ、第11トレンチ、第12トレンチの順に概要を述べる。

#### 1) 第10トレンチ (第4図・第5図)

I-11、J-11区に設定した東西方向のトレンチで、幅2m、長さ6.9mの規模である。上段墳丘部分については、平成20年度に調査を行った第4トレンチを1.3mの幅で北に拡張し、段から前方部にかけては50cmの幅で北に拡張した形である。

このトレンチは、縦方向の区画石の検出が主な目的であったが、J-12杭の西約80cmの場所から検出された集石の年代等の検討も目的にした。

調査は、上段の葦石の検討から始めた。第4トレンチで検出された上段の葦石についての調査時の所見は、散在していて基底石列はみられず、下部に約30cmの幅で長さ10cm内外の小ぶりな石が分布し、その上部に長さ20cm内外の石が散在する形で、傾斜角度は約25°を測り、他のトレンチより緩やかであるとのものであった。しかし、後円部の中心を求め、第1トレンチ～第4トレンチの上段の葦石の裾の位置を検討したところ、この第4トレンチだけが外側に張り出すことがわかった。

そこで、第4トレンチで検出した下部の小ぶりな石の周辺を精査したところ、まだ下に石があることが判明したため外したところ、下から葦石が現れた。これを手がかりに北側に拡張し、上段葦石の裾を把握することができた。

葦石は、南端で検出した裾部分の残存が良好であった。この裾の石は、長さ30cmを超えると推定され、20cmほどの高さで露出する状況であった。裾に沿って幅80cm、墳頂方向に50cm程度の範囲が良好に残存していた。裾と考えられる石は、第5図のD-D'断面でわかるように標高63.45mを測り、石の上端は南端の石が突出して高いためレベルは揃っていない。崩れて散在する葦石にも20cmを超えるものが多く見られた。主な調査目的であった縦の区画石は、確認できなかった。

今回検出された裾は、第4トレンチ調査時より25cmほど墳頂中心点寄りになったが、第1トレンチ～第3トレンチの裾の位置と比較すると、21cm外側に張り出すことになる。残存する葦石から推定される墳丘の角度は、29°45'である。

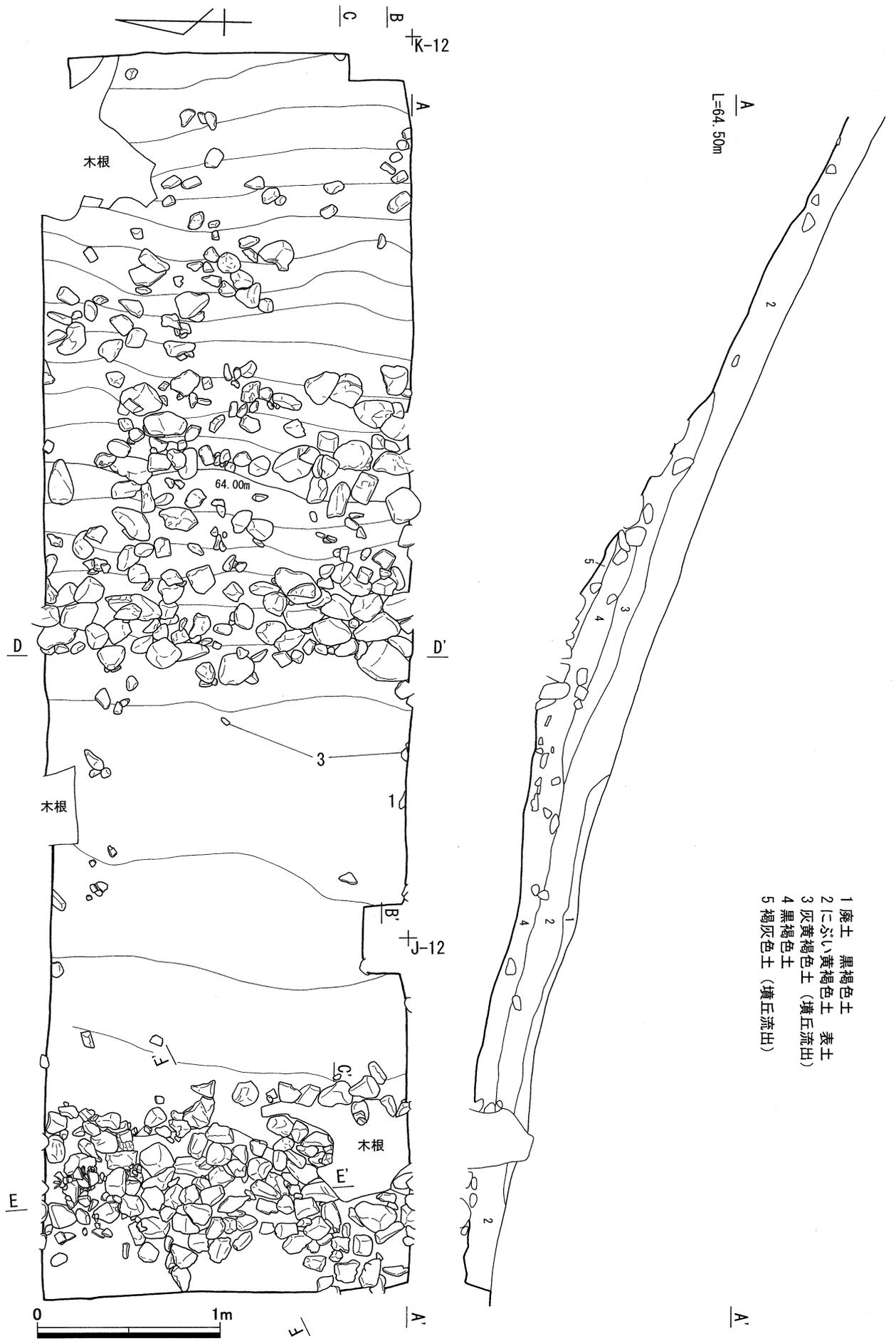
第4図のA-A'断面の上段葦石の裾から約1.2m前方部寄りまでは傾斜角度約5°の平坦な部分があり、段と考えられる。そこから前方部方向は角度約14°と傾斜が急になる。

J-12杭から西約80cmからトレンチの西端にかけて検出された石は、この傾斜が急になる部分に位置する。石は、上段の葦石とは異なり、10～15cmの大きさのものがほとんどで、20cmを超えるものは数少ない。この石の検出状況を示したのが、第5図のE-E'、F-F'で、石が重なり合っていた。この重なり合った状態が当初の姿とは考え難いため、作図しながら上の石から取り外していった。すると、石の間から埴輪片が出土したため、重なった部分を極力取り外した状態が第4図の平面図である。埴輪片の出土は、重なり合った石の間や上、石が存在しない部分は石より高いレベルに限られる。また、石が存在しない部分にトレンチを入れてその下の状況を確認したが、下から埴輪片が出土することはなかった。このことから、この石は古墳築造時のものと考えられる。

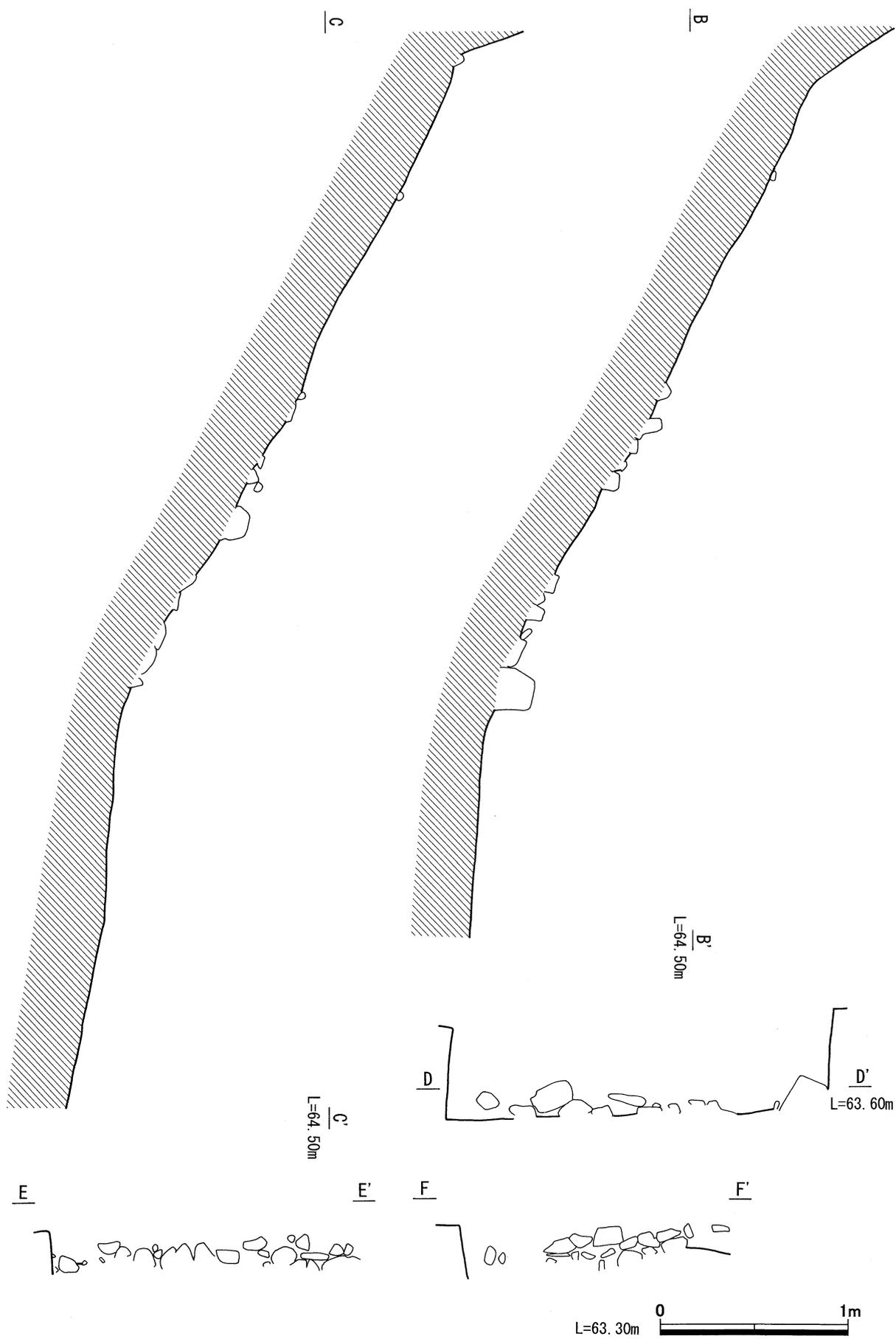
トレンチから、第8図1～10、第9図12の遺物が出土した。

#### 2) 第11トレンチ (第6図)

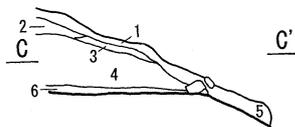
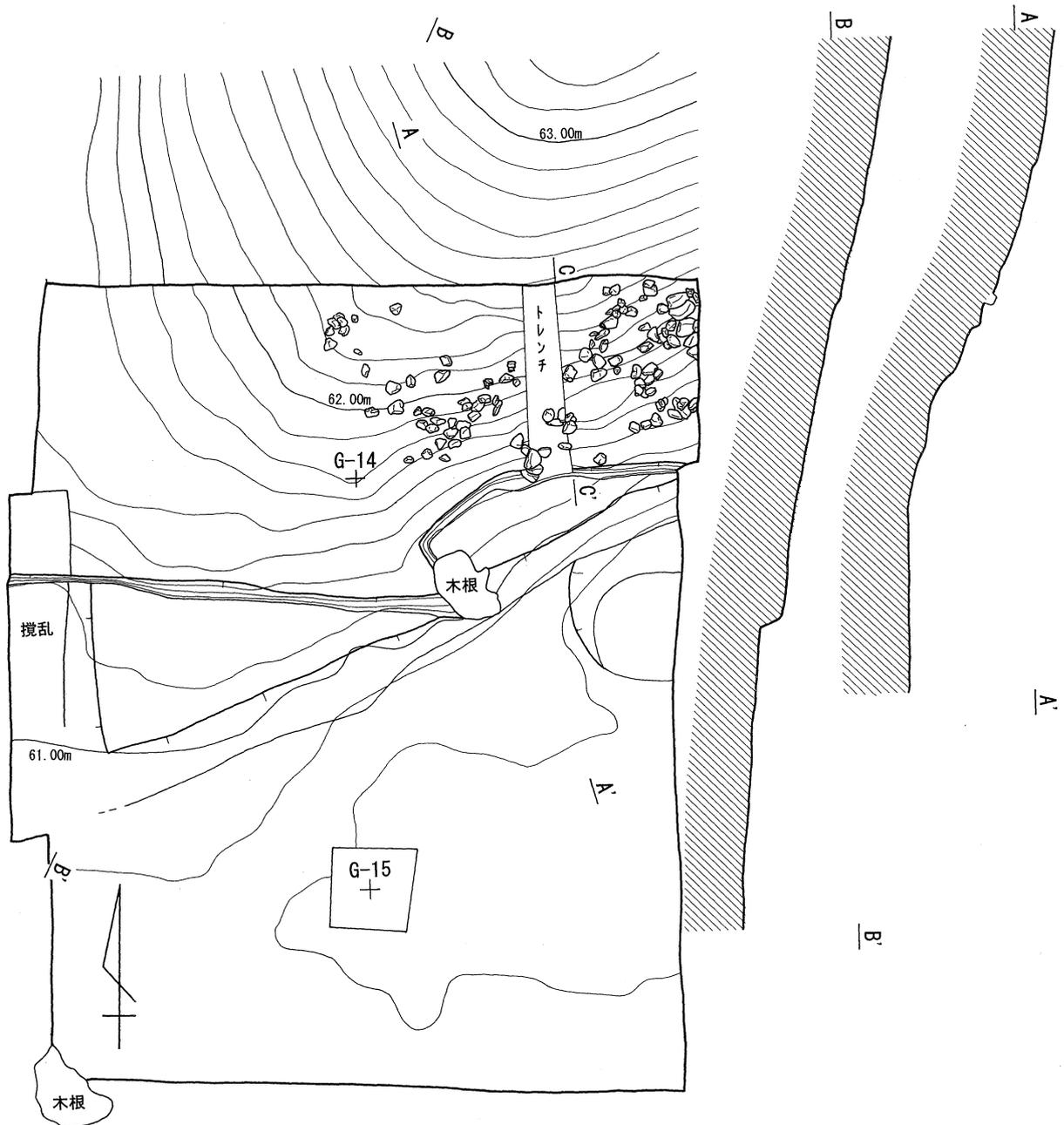
F-13～15、G-13～15区に設定した東西約7.6m、南北約10mの長方形のトレンチで、前方部南側の裾から前端部のコーナーの検出を目的に設定した。



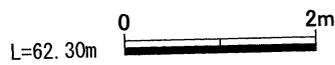
第4図 第10トレンチ実測図(1)



第5図 第10トレンチ実測図(2)



- 1 黒褐色砂質土
- 2 暗灰黄色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒色土 固くしまった土
- 5 暗灰黄色土
- 6 暗グレイ 褐色粘質土



第6図 第11トレンチ実測図

F-13、F-14区の現況の墳丘面には、瓦や陶磁器が混じる小石が厚く積み重なっていて、近世以降に改変されていることが明らかであった。G-13区の墳丘の東端からは、昭和54年度の調査時にも検出された縦方向の区画石が検出されたが、それ以外の墳丘からは大きさ10～20cmの石が散在する状況で検出されるにとどまり、葺石が残存しているとは考えられない。

墳丘の裾付近は、第6図の平面図及び断面図が示すように、F-14区では直線的に、G-14区では緩く弧状を描くように約30cmの高さで削り取られていた。

裾は、前端部のコーナー付近がすでに削り取られていて、状況を把握することはできなかったが、側面の裾から周溝にかけては良好に残存していた。

トレンチ東端の裾部分には、東西約1.3m、南北約2mの規模で、断面皿状にくぼむ部分がある。この部分の最深部分は、裾の標高60.9mより30cmほど深い標高60.59mを測る。

墳丘の構築状況を確認するため、G-13区に幅40cmで2.3mの長さのトレンチを設定して、地山まで掘り下げた。第6図のC-C'断面がこの部分の断面図で、地山のオリーブ褐色土の上に自然堆積土の可能性が高い暗オリーブ褐色粘質土（6層）が2～8cmの厚さで堆積する。その上に固くしまった黒色土（4層）が最大で60cmの厚さで堆積する。黒色土の上面のレベルは、標高62.19mを測り、前方部周溝北側の第8トレンチで検出された黒色土の上面のレベル標高62.1mより約10cm高くなる。この黒色土を覆土とする直径約25cmの掘り込みを暗オリーブ褐色粘質土（6層）の上端で検出していることから、この黒色土は竪穴住居跡等の遺構の可能性がある。黒色土の上に堆積する暗灰黄色土（2層）と黒褐色土（3層）が古墳の盛り土の残存と考えられる。

トレンチから、第8図11、第9図13・14・16・17・19・20の遺物が出土した。

### 3) 第12トレンチ（第7図）

H-7～9区に設定した東西約2.5m、南北約9.5mの長方形のトレンチで、くびれ部から周溝にかけて設定した第6トレンチと、周溝外縁から周溝にかけて設定した第8トレンチの周溝底面のレベルの変化を確認するために設定した。

周溝底面は、トレンチ北端で標高61.42m、前方部方向に緩やかに傾斜し、約5m南で標高61.26m、ここから傾斜が急になり、北端から約6.7mの位置で標高61.02mを測り、トレンチの南端で標高60.96mを測る。第6トレンチで検出した前方部の裾のレベルが標高60.96mであり、61.02mまでの間はほぼ水平といえる。標高61.02mの地点から前方部の裾までの距離は約6.7mである。後円部北側の第3トレンチで検出した周溝底面の幅が約6.2mであり、後円部北側の周溝の延長がこの部分であり、その外側にテラス状のものが付くと考えたい。しかし、底面の深さは第3トレンチの方が40cmほど深くなる。この後円部側の周溝の方が前方部側より深くなるのは南側も同様で、後円部南側の第1トレンチの底面の最深部が標高60.39mを測り、第11トレンチの周溝底面より約40cm深くなる。

H-8区の中央北寄りから幅約80cm、長さ2.05mにわたり、5～30cm程度の石が集中する箇所がみられた。第7図の集石の中央のB-B'、西端のC-C'断面にみられるように、集石は盛り上がるような状態で確認面より高い位置にも見られ、掘り込みの中にも充填する状態であった。C-C'断面では、確認面の幅66cmの掘り込みが見られ、最深部は中央南寄りで標高61.01mを測る。中央のB-B'では、確認面の幅74cm、最深部は中央にあり標高60.93mを測る。

この2箇所の断ち割り部分から遺物が出土しなかったため、遺構の性格と時期の決め手はない。

トレンチ西壁の土層で観察したところ、集石は黒色土（3層）中に構築されていた。周溝内に構築されていることから、時期の上限を古墳築造時に、下限を第3トレンチ周溝内の黒色土から山茶碗が出土していることから13世紀頃と考えている。



第7図 第12トレンチ実測図

## (2) 遺物

吉岡大塚古墳の主要な発掘調査は、ほぼ終了した。そこでここでは、今回の第5次調査の出土遺物、未報告の第1次調査の出土埴輪、吉岡大塚古墳の埴輪の特徴について概述する。

### 1) 第5次調査出土遺物(第8図・第9図)

遺物は、埴輪、須恵器、縄文土器、石器、土師器、灰釉陶器がある。

第8図1～10が埴輪である。1は、第10トレンチJ-11区から出土した円筒埴輪の口縁部から突帯までの破片で、口縁部は緩やかに外反し、外面に黒斑がある。口径27.4cmを測り、突帯の端部中央から口縁部までの高さ11.7cmを測る。調整は、内外面とも横方向のナデ仕上げである。2は、第10トレンチI-11区から出土した円筒埴輪の口縁部の破片で、口縁部は真っ直ぐ立ち上がり、口径24.0cmを測る。口縁端部の中央を2mmの幅で平らにくぼませる。3は、第10トレンチJ-11区から出土した円筒埴輪の破片で、上方に開く。現存の最大径は突帯部分で、26.8cmを測る。突帯の端部中央が浅くくぼみ、下側は面取り状を呈する。内面を板ナデで仕上げる。突帯が器壁に接合する部分に沈線がある。4は、第10トレンチI-11区から出土した埴輪片で、突帯から透かし孔までが残存する。突帯の端部中央がくぼむ。調整は、外面が横方向の指ナデ、内面は横方向の板ナデである。透かし孔は、直径10cm程度の円形で、2方向と推定される。色調は、器壁が橙色、突帯が浅黄橙色を呈し、相違が明瞭である。現存の最大径は、突帯部分で25.0cmを測る。突帯が器壁に接合する部分に沈線がある。5は、第10トレンチI-11区から出土した埴輪片で、器壁の厚さ0.7～0.95cmと薄く仕上げられ、上端に円形の透かし孔がある。突帯の下がふくらみをもつことから、朝顔形円筒埴輪の可能性はある。6・7は、埴輪の突帯部分の破片で、6は第10トレンチI-11区から、7は第10トレンチJ-11区から出土した。7は、器壁の色調が浅黄橙色、突帯は橙色を呈し、色調の相違は一目瞭然で、使用された粘土も異なる可能性が高い。8は、第10トレンチJ-11区から出土した底部片で、底径16.0cmと推定され、底部の端部は丸みを帯びる。内面を板ナデ調整する。9は、第10トレンチJ-11区から出土した底部片で、底径15.6cmと推定され、底部の端部はナデにより平滑に仕上げられる。10は、第10トレンチI-11区から出土した朝顔形円筒埴輪の口縁部片で、端部を折り返して肥厚させる。端部はナデ仕上げが施され、端部の中央は稜が付くほど鋭く仕上げられる。

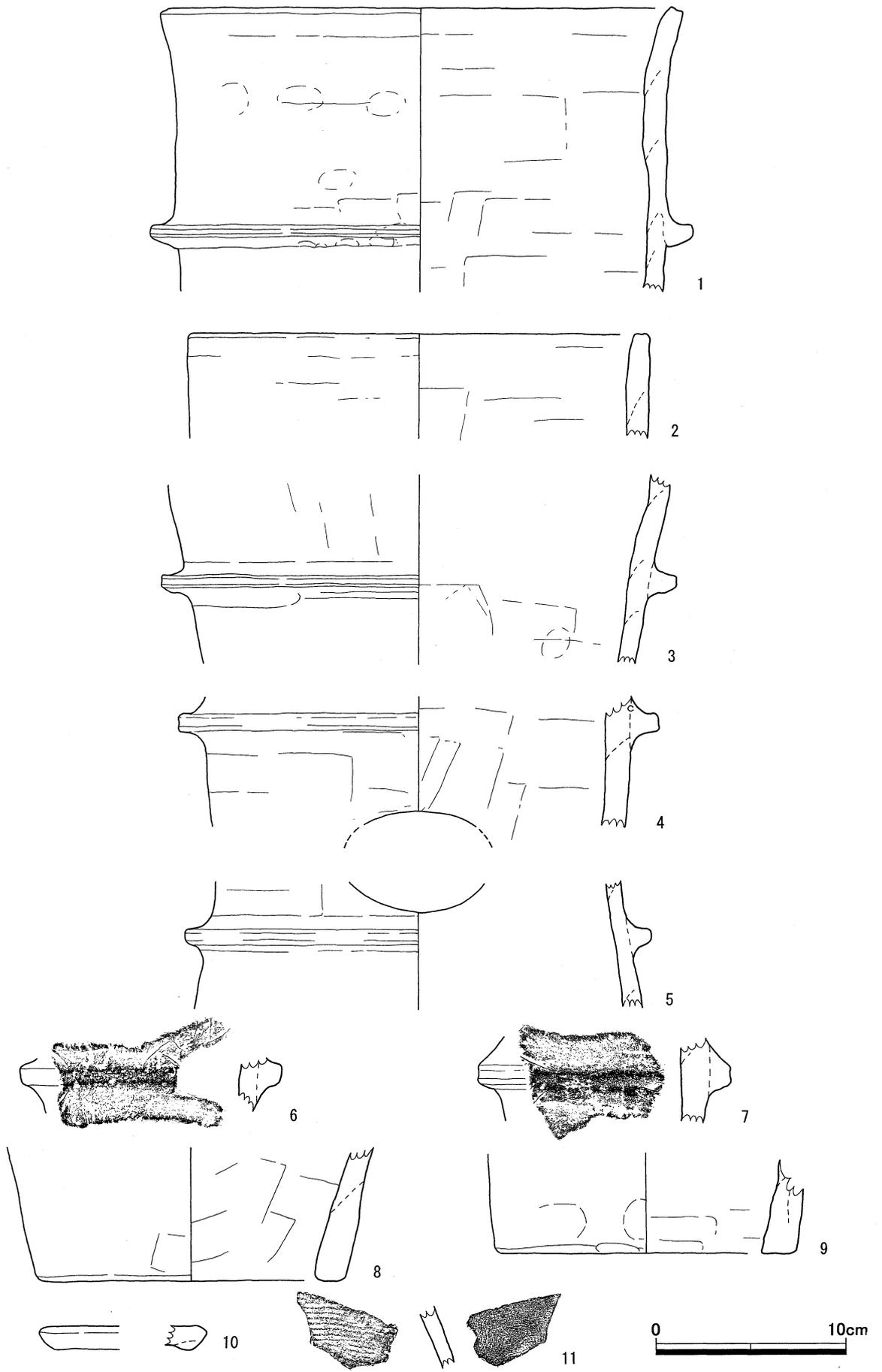
11は、須恵器である。第11トレンチG-14区から出土し、内外面とも黒色を呈する。外面に横方向のタタキ、内面にかすかに当て具痕が残り、直径20cm程度の器種の破片と考えられる。

12～15は縄文土器で、12は第10トレンチJ-11区、13は第11トレンチF-14区、14は第11トレンチF-13区、15は表採である。12は外面に連続爪形が施され、中期中葉の北屋敷式と考えられる。13の外面にはシダ状文と平行沈線が施され、中期後葉の曾利式と考えられる。14の外面上端の中央付近に波状貼付が残存し、左下には平行する沈線が施され、右下は縄文を施文後すり消されている可能性がある。15は、胎土に金雲母が多量に混じり、堅緻な焼成で阿玉台式に似た特徴がある。14・15も中期の土器と考えている。

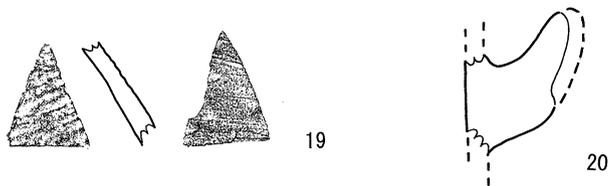
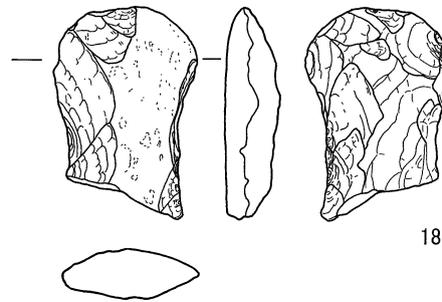
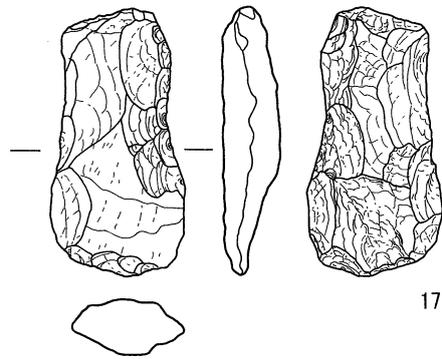
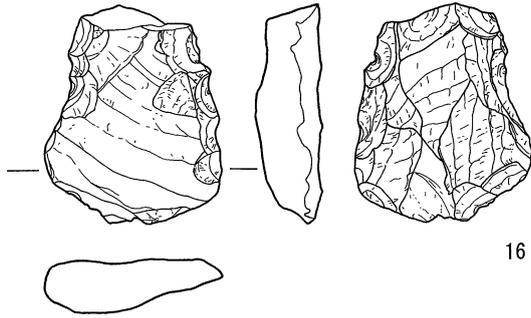
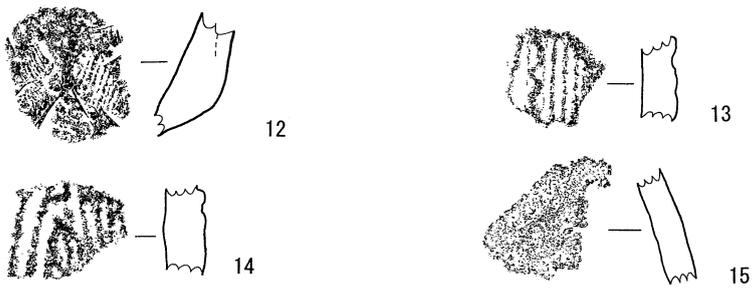
16～18は打製石斧で、16は第11トレンチ表採、17は第11トレンチG-14区、18は前方部西側から表採された。16は泥岩製で基部を欠損し、現存長8.6cm、最大幅6.8cmを測る。17は緑泥片岩製で基部を一部欠損すると考えられ、現存長10.6cm、最大幅5.2cmを測る。18は泥岩製で刃部を欠損し、現存長8.3cm、最大幅5.5cmを測る。

19は、第11トレンチで表採された灰釉陶器の甕の破片と考えられる。内外面とも色調灰白色を呈し、外面に幅広のタタキがみられ、内面はナデ調整が施される。

20は、第11トレンチF-13区から出土した土師器甕の把手片で、現存長4.0cm、接合部分の幅4.1cmを



第8図 第5次調査 出土遺物実測図(1)



第9図 第5次調査 出土遺物実測図(2)

測る。把手が取り付く器壁の厚さは6mmを測る。

## 2) 第1次調査出土埴輪(第10図)

量が少なく全形がわかる個体もないため、特徴がわかるものを掲載する。

21・22は円筒埴輪、25・28は朝顔形円筒埴輪、26・27は底部である。21・26・28は後円部東側のAトレンチ、23・24は後円部北側のHトレンチ、27は後円部南側のBトレンチ、22は前方部南側中央のDトレンチ、25は出土地不明である。

21は、口径26.0cm、器壁の厚さ0.55～1cmを測る。口縁部は垂直気味に立ち上がる。22は、残存部分の中央付近に最大径があり、28.2cmを測る。器壁は1.45～1.55cmの厚さがあり重量がある。突帯の端部付近はナデ調整により面取り状を呈する。内外面を板ナデ調整する。23は、現存の上端で直径41cmを測り、透かし孔がある。24は、円筒部の最大径38.4cmを測り、突帯の端部は幅1cmを測り、中央をくぼませる。25は、透かし孔部分に最大径があり35.0cmを測り、上方に徐々に径を狭めることから、朝顔形円筒埴輪の胴部と考えられる。器壁の厚さ1.3～1.5cmを測る。透かし孔は、直径7cm程度の円形と推定される。内面に横ナデ調整を施す。26は底径16.4cm、27は底径16.0cmを測る。28は口径34.0cmを測り、器壁の厚さ0.8～1.1cmで、口縁端部を折り返して肥厚させる。肥厚させた端部下側を指頭で押圧するため、指頭痕が顕著である。外面に黒斑がある。

## 3) 吉岡大塚古墳の埴輪の特徴

ここでは、市内の古墳時代中期の円墳である浅間神社3号墳から出土した埴輪と比較することにより、吉岡大塚古墳の埴輪の特徴を列挙する。

### 1. 円筒埴輪

#### i 器形と調整(第11・12図)

全形が判明しないので、2段目、3段目という表現ではなく、上段、下段という表現を使用する。29～32は、比較的残存状況の良好なものである。

29は、口縁部から突帯端部の中央までの高さ11.7cm、下段は突帯間で15.05cmを測り、上段の方が短い。30も、口縁部から突帯端部中央までの高さ10.75cm、突帯中央から下段の残存部分が11.0cmを測り、上段の方が短い。30は、下段の透かし孔部分で直径22.1cmを測り、口縁部の直径21.8cmを上回り、他の埴輪と形が異なる。31も上段の高さが11.7cmしかない。32は、29～31とは異なり、口縁部から突帯端部の中央までの高さが13.95cmを測る。

浅間神社3号墳の円筒埴輪は3段から成り、1段目が最も高さがあり次いで3段目、2段目が最も短い。32は浅間神社3号墳の埴輪と同様の比率の可能性はあるが、29～31は、段の高さの比率が異なる。

33～38は口縁部で、33～35は外反、36はわずかに外反、37・38は直立する。浅間神社3号墳の口縁部は外反するものだけであり、吉岡大塚古墳の埴輪は多様な口縁部の形状がある。

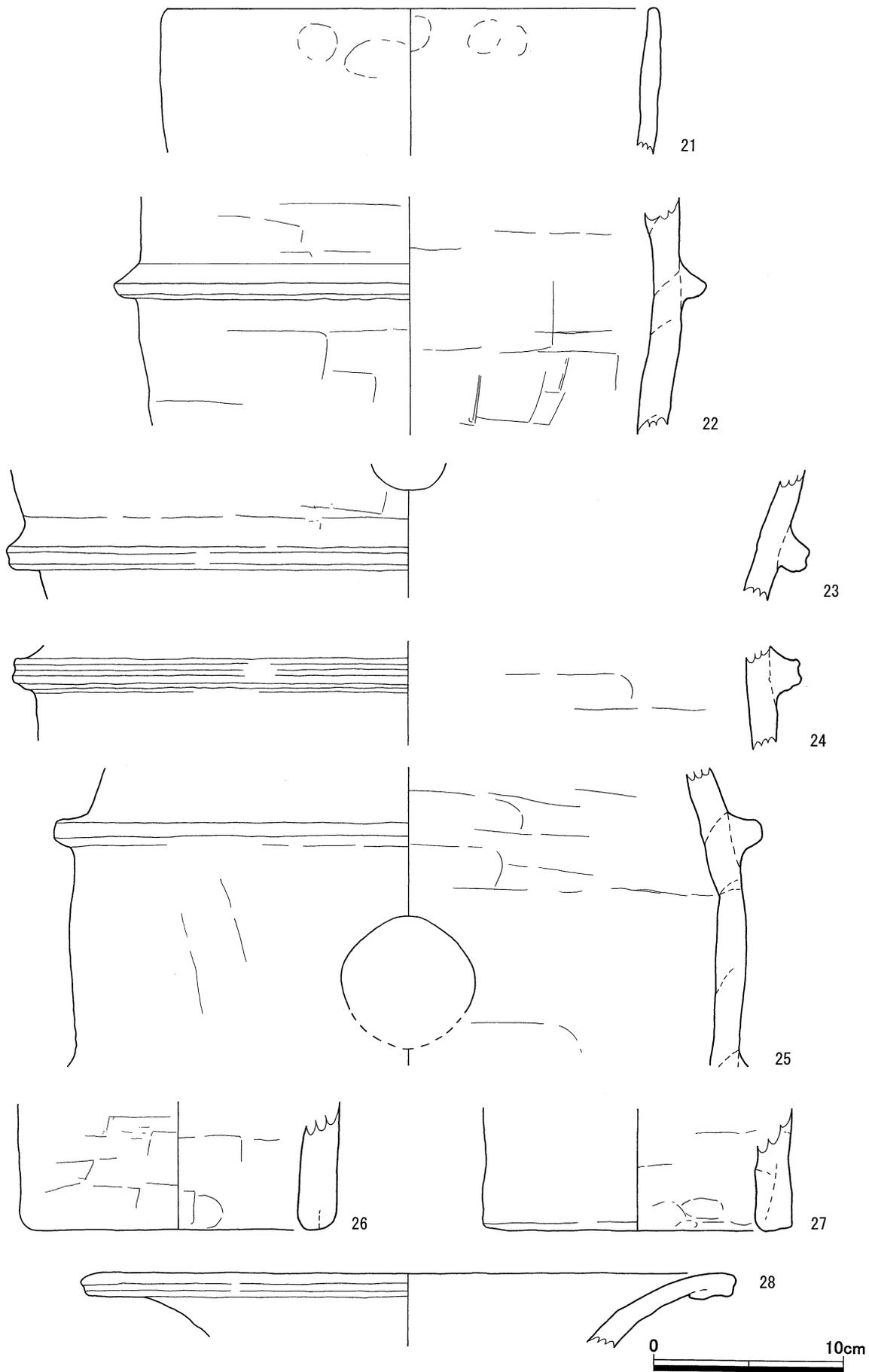
39・40は、直径の大きなものを示した。口径がわかる埴輪は10点あり、そのうち最大のものが29の28.6cm、次が1の27.4cmであり、最小のものが21.8cmである。39は最大径41.0cm、40は最大径38.4cmを測る。このように大きな埴輪があるのも特徴である。

41・42は、底部片である。41は底端部の内側に粘土を貼り付けた後、底面をナデにより平坦に仕上げる。42の底部は、ナデ調整と思われるが、ミガキを施したように光沢を帯びる。

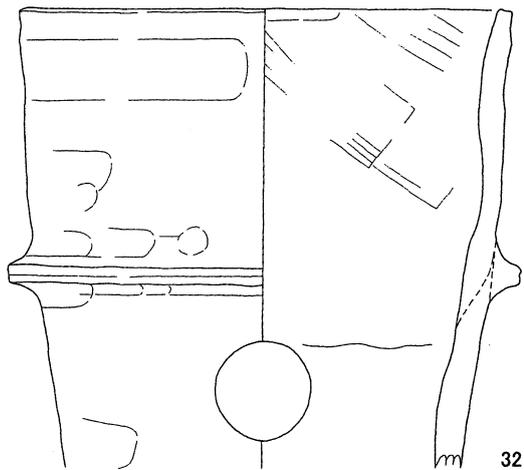
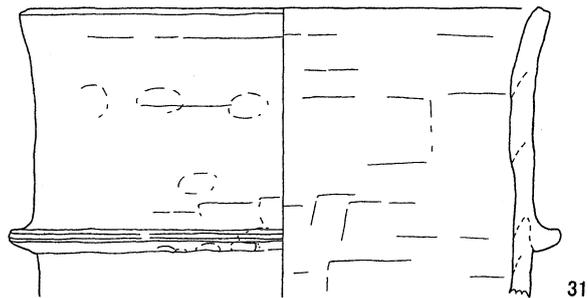
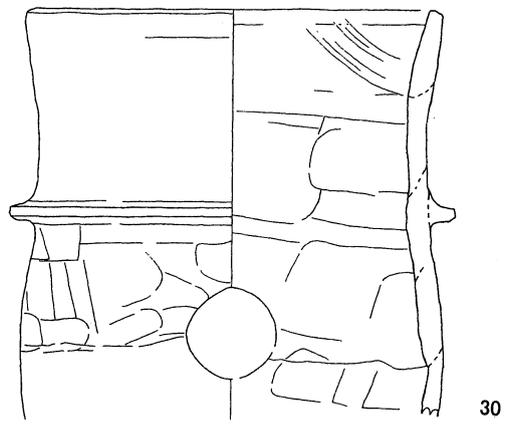
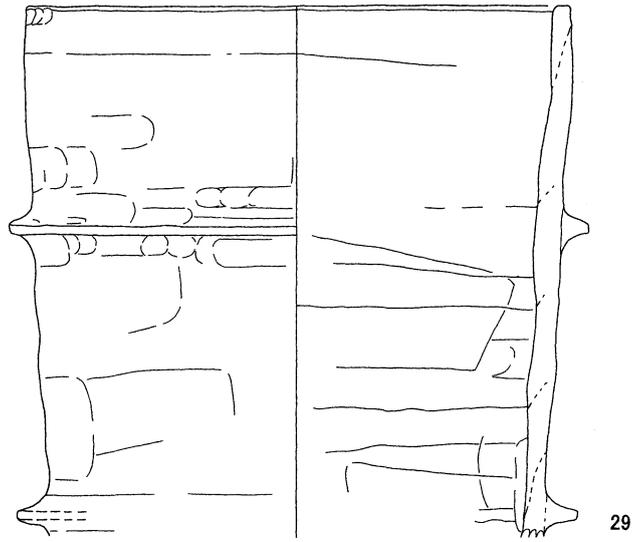
埴輪の調整は、ナデ調整と考えられるが、32の内面、44の外面にはハケがみられる。

#### ii 器壁の厚さ(第13図・第16図)

浅間神社3号墳の埴輪は、第16図76が最も厚く、基部で1.45cmを測る。この古墳の埴輪は、基部の

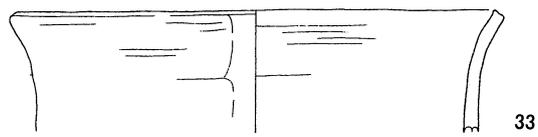


第10図 第1次調査 出土遺物実測図

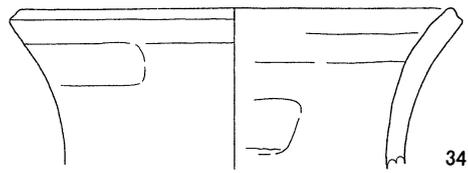


0 10cm

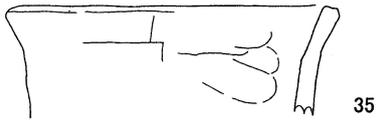
第11図 吉岡大塚古墳出土埴輪実測図(1)



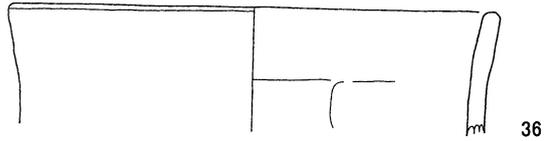
33



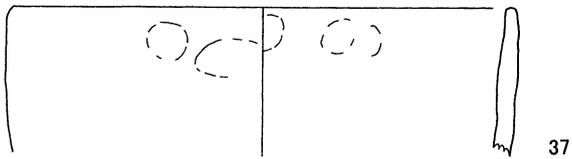
34



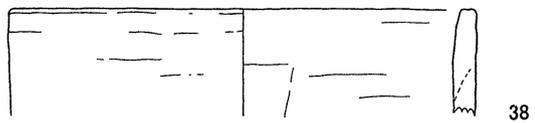
35



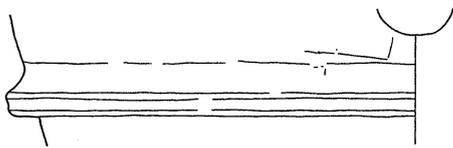
36



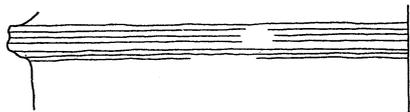
37



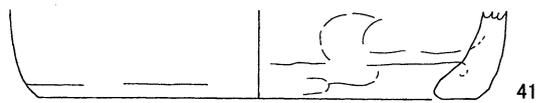
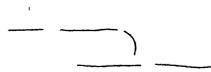
38



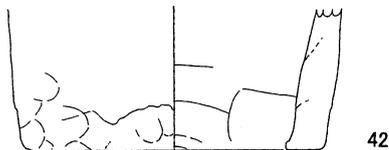
39



40



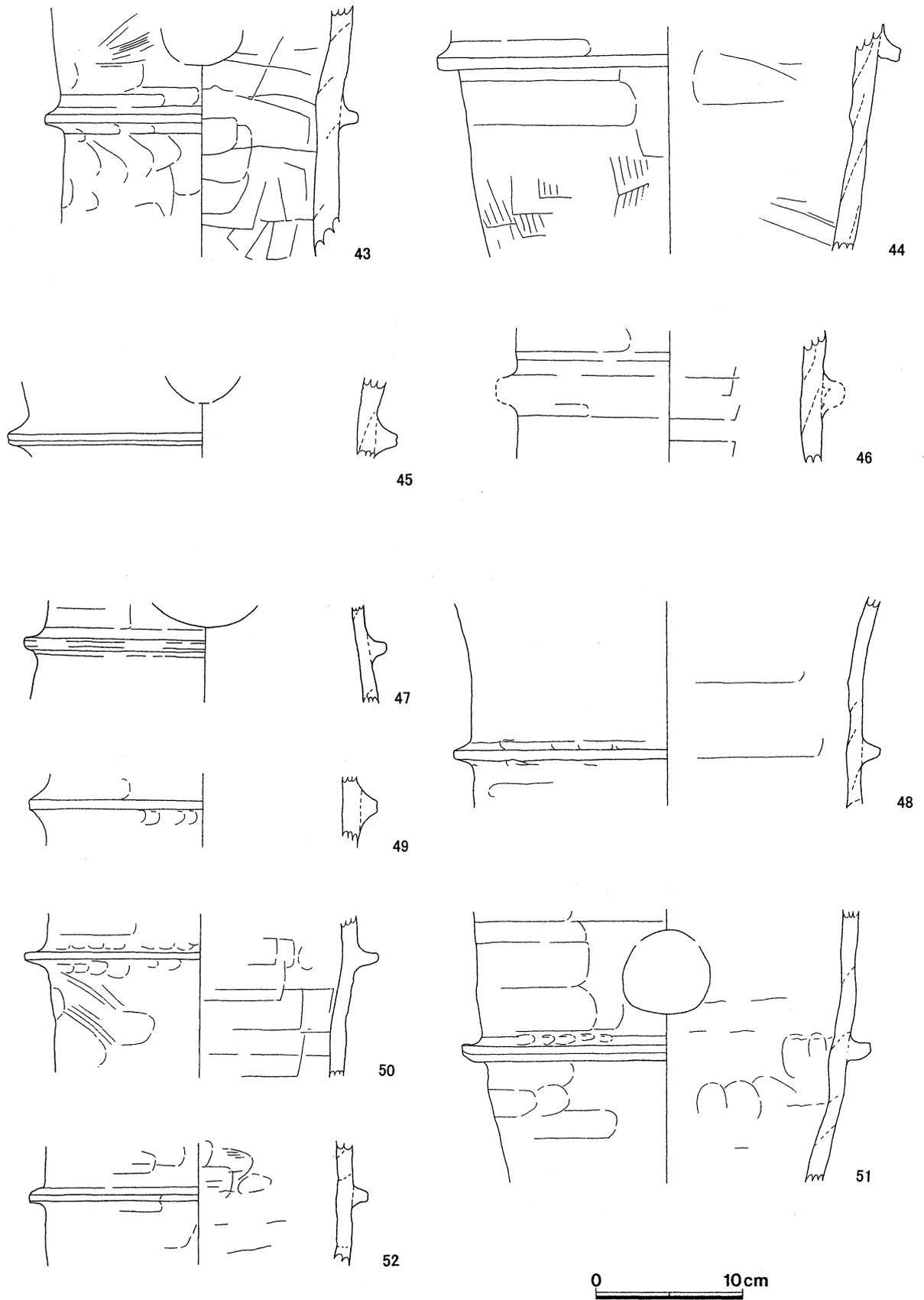
41



42



第12図 吉岡大塚古墳出土埴輪実測図(2)



第13图 吉岡大塚古墳出土埴輪実測図(3)

厚さが1.2～1.45cm、2段目・3段目の場合は最も厚いものでも1.25cmである。

これに比べ吉岡大塚古墳の埴輪は、器壁の厚さが顕著である。43は、全ての円筒埴輪の中で最も厚く、1.45～1.85cmを測り、44は1.35～1.55cm、45は1.25～1.6cm、46は1.2～1.45cmを測る。

一方、47～52は埴輪の中で器壁が薄いものである。器壁が最も薄いのは、55の0.8cm、次が33の0.65～0.8cmである。47は0.7～0.95cm、48が0.9～1.0cm、49が0.8～1.1cm、50が0.95～1.1cm、51が0.9～1.15cm、52が1.0～1.15cmである。これらは、浅間神社3号墳と同程度の厚さである。

### iii 突帯（第14図）

吉岡大塚古墳の埴輪の突帯は、高さ1cmを下回るものはないが、浅間神社3号墳の突帯は、高いものでも0.9cmしかない。

53～61は、高さが1.7cm以上を測るものを高い順に掲載した。53が2.35cm、54が2.25cm、55が2.2cm、56～58が1.9cm、59が1.8cm、60・61が1.7cmを測る。突帯から器壁にかけての断面形は、大量の粘土を使って器壁に接合するため、山形を呈するものが多い。

62～65は、突帯が取り付く円筒部に沈線があるものである。沈線は、62が幅1mm、深さ2mm、64が幅2mm、深さ3mmである。この沈線は、突帯を円筒部に貼り付ける際の目印とされる。しかし、62・64の沈線は単なる目印にしては深すぎるので、高い突帯を円筒部に接合するための役目もあるのではないかと考えたが、沈線に粘土が充填しておらず空洞になっている部分がある点、今後の検討課題である。

65・66は、突帯と円筒部の色調が異なるものである。65は、円筒部が橙色、突帯が浅黄橙色を呈するが、同じ粘土と考えられる。66は、円筒部が浅黄橙色、突帯が橙色を呈し、使用された粘土が異なると考えられる。55も突帯と円筒部の色調が異なるもので、円筒部がにぶい橙色、突帯は浅黄橙色を呈する。色調は異なるが同じ粘土を使用していると考えられる。

## 2. 朝顔形円筒埴輪（第15図・第17図）

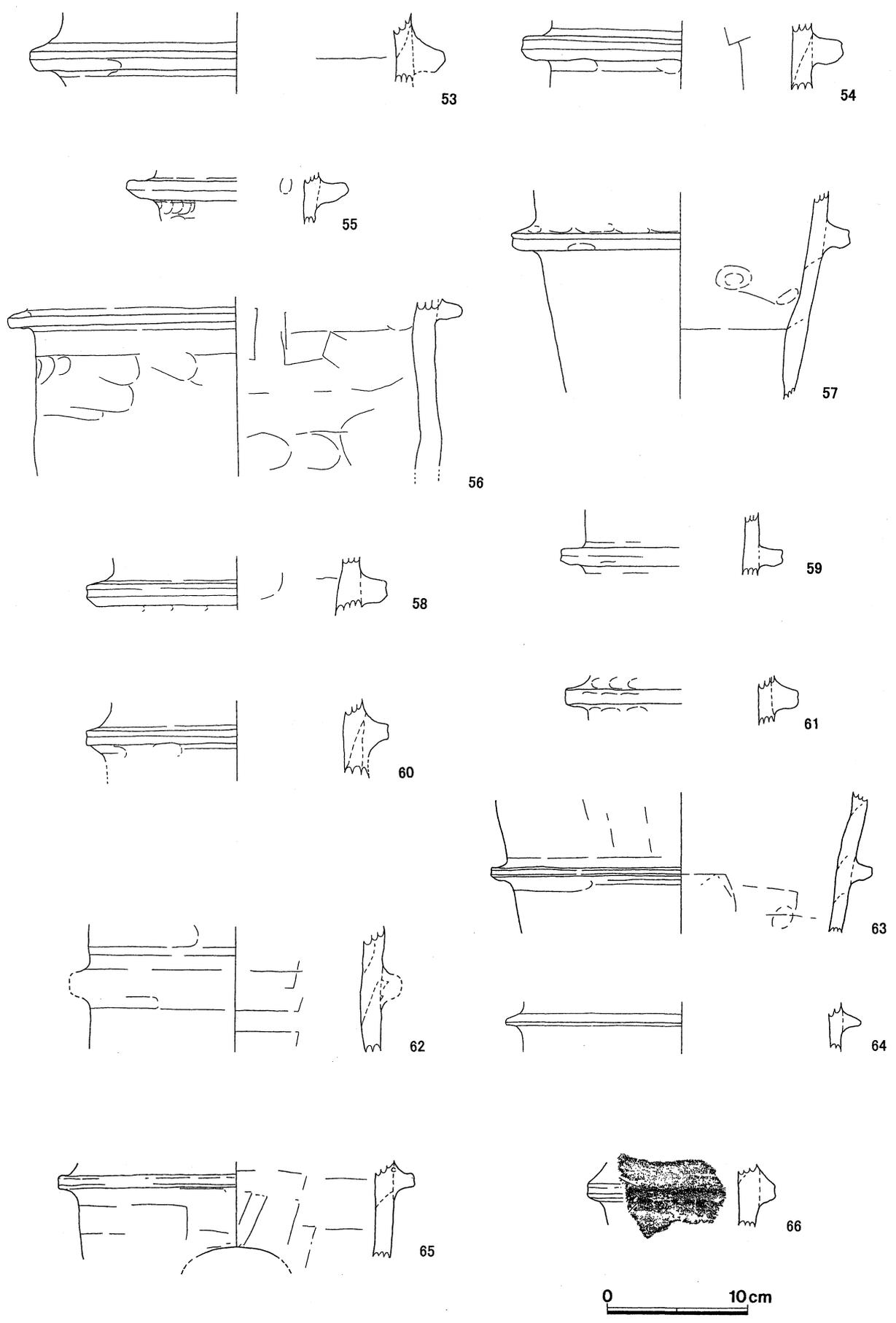
まず、浅間神社3号墳の朝顔形円筒埴輪の特徴を概述する。

頸部から直線的に伸びる口縁部は、中程に突帯を付ける。口径は、78が41.9cm、79が37.0cmを測る。基部から頸部までは4段から成り、3段目に2方向の長方形の透かし孔がある。肩が張り、頸部に至る。胴部の最大径は、80が25.5cm、81が27.0cm、82が25.2cmを測る。この3個体のすべての頸部に突帯が付く。

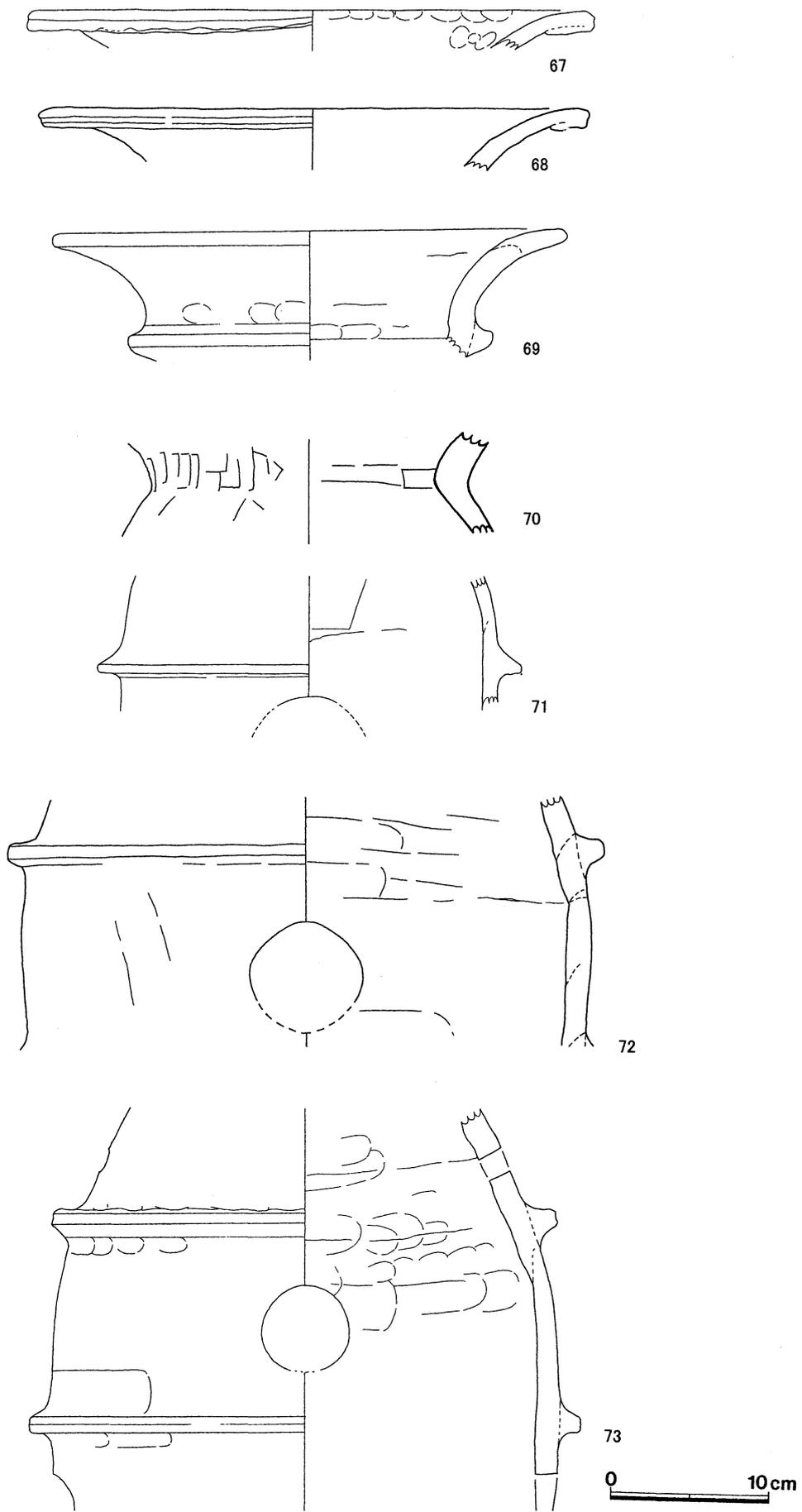
吉岡大塚古墳の朝顔形円筒埴輪は、67～69の口縁部、70の頸部、71～73の胴部がある。

67は口径36.2cm、68は口径34.0cm、69は口径32.7cmを測る。67・68は緩く外反し口縁端部を折り返して肥厚させる。69は大きく外反するが口縁端部は肥厚しない。70の頸部は直径20cmを測り、浅間神社3号墳の埴輪と異なり突帯が付かない。この頸部は、72と同程度の直径の胴部に付くと考えられる。71の胴部は、突帯の下で直径24cmを測る。肩の下に突帯を付け、なだらかな肩から頸部に移行すると考えられる。突帯の下に透かし孔がある。この胴部の直径と釣り合う口縁部が67～69と考えられる。72は透かし孔の部分で直径35.0cmを測り、なだらかな肩に突帯が付く。73は、突帯2条の3段分が残存していて、すべての段に透かし孔がある。透かし孔の大きさは、下段が5.5～6.0cm、中段が5.5cm、上段は一部が残存しているだけであり不明である。下段と上段の透かし孔は同じ方向に空き、中段のものは上段・下段とは約90°向きを変えていることから、4方向に透かし孔が存在した可能性がある。肩はなだらかに頸部に移行し、途中で突帯を付ける。

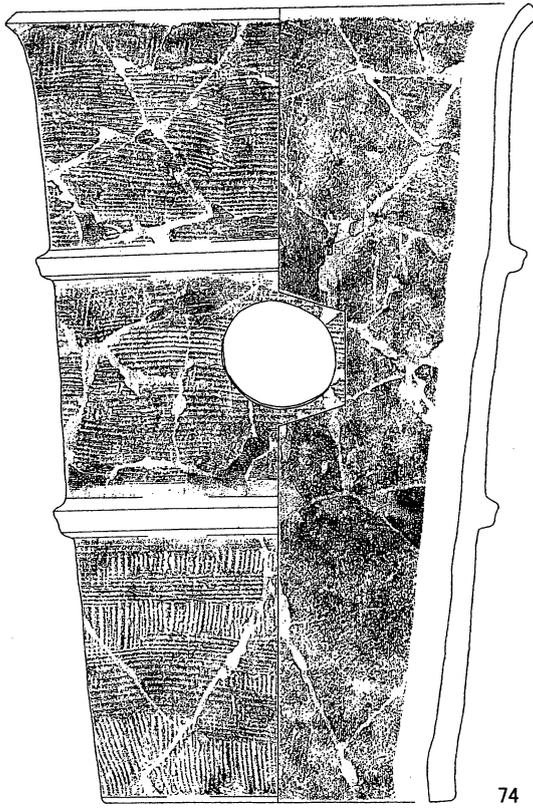
吉岡大塚古墳の朝顔形円筒埴輪は、浅間神社3号墳と比較すると相違点が多い。特に口縁部近くの形状は、壺の口縁部の形状そのものである。



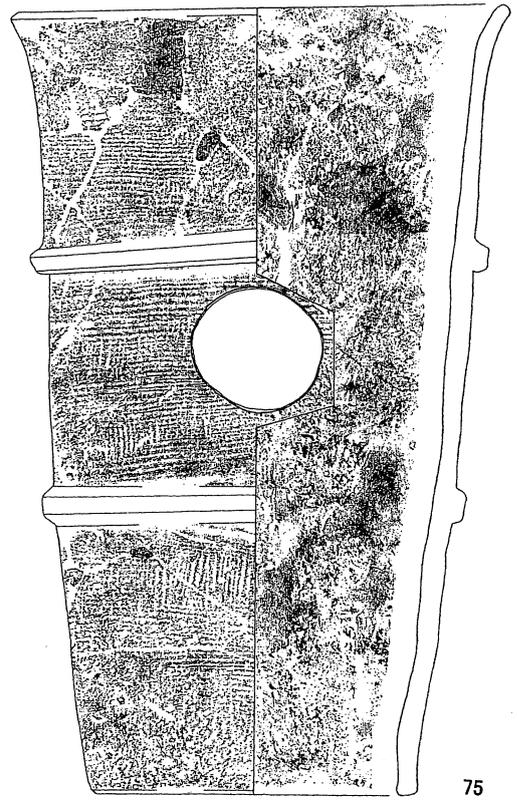
第14図 吉岡大塚古墳出土埴輪実測図（4）



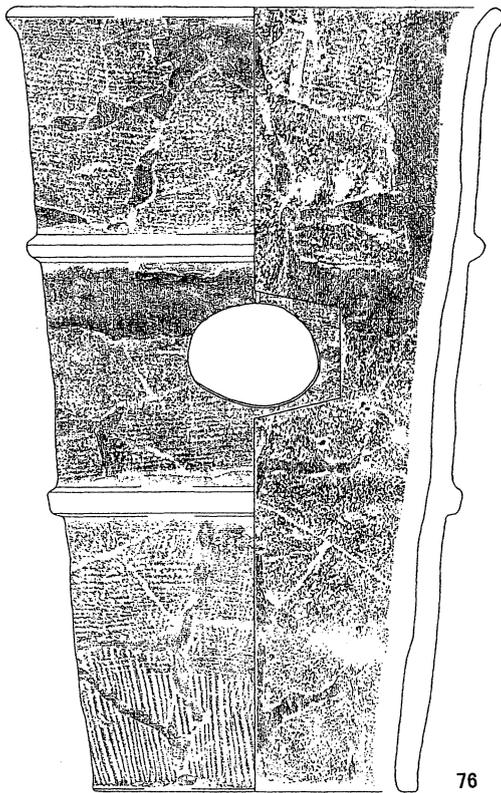
第15図 吉岡大塚古墳出土埴輪実測図(5)



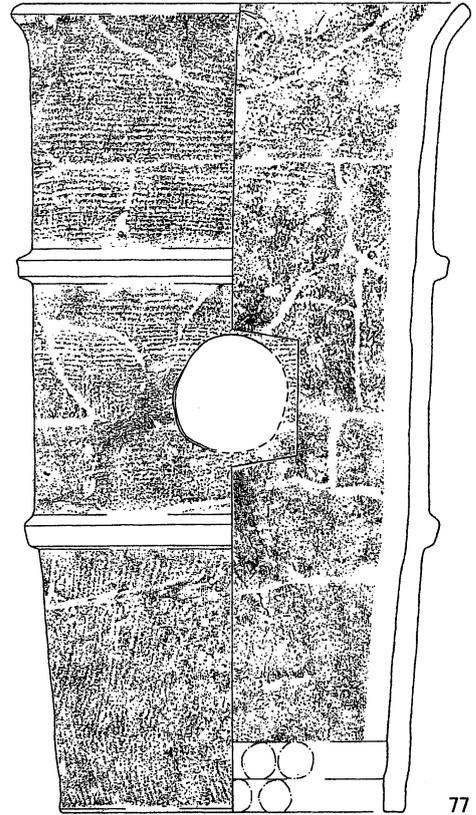
74



75



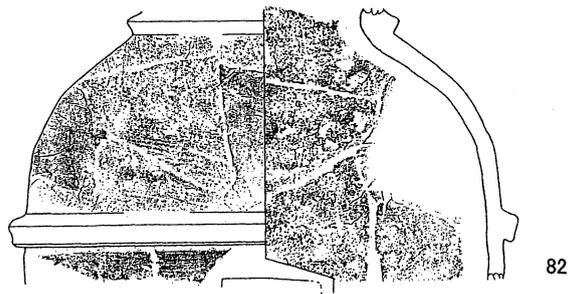
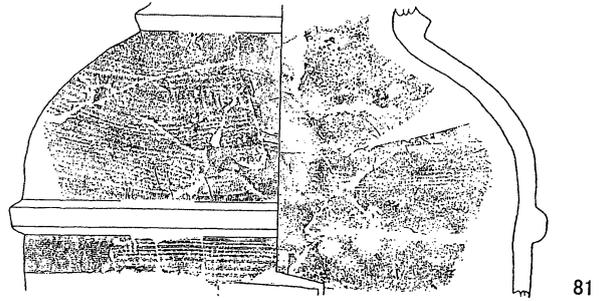
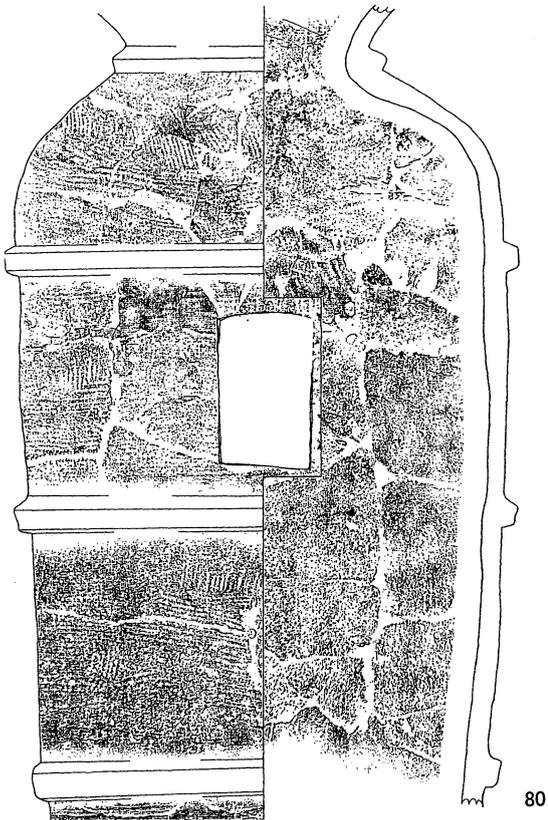
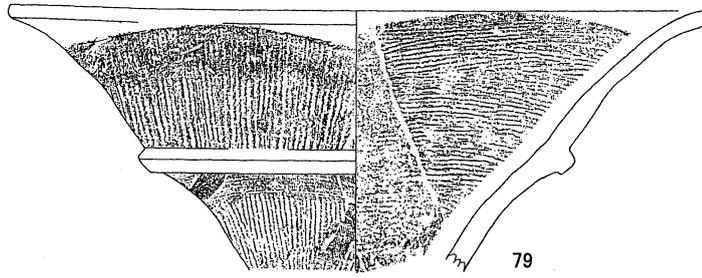
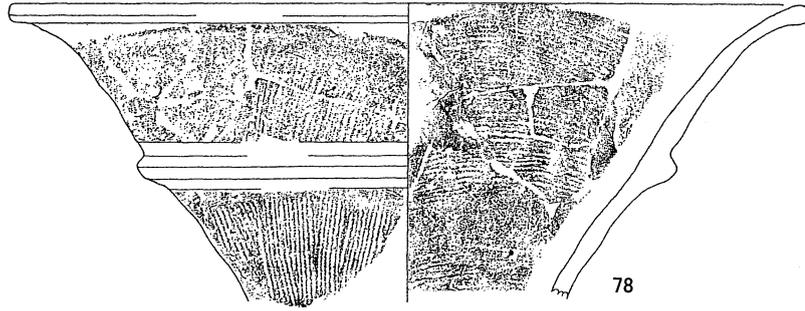
76



77

0 10 cm

第16図 浅間神社3号墳出土円筒埴輪実測図



第17図 浅間神社3号墳出土朝顔形円筒埴輪実測図

## 第4章 行人塚古墳の出土遺物

### (1) 古墳の概要

行人塚古墳は、史跡和田岡古墳群のほぼ中央に位置する前方後円墳である。前方部が、太平洋戦争時の土砂供出のために削り取られ、以後後円部だけが地上に残っていた。

昭和57年度、古墳の規模確認等を目的とした調査が後円部の北西側と南側で行われ、北西側から削平された前方部と周溝が、南側から後円部の周溝が検出された。昭和59年度には後円部の東側から南東側にかけて調査が行われ、周溝を確認した。この調査により、全長43.7m、後円部の直径25.4m、前方部長さ18.3m、周溝は、前方部前端で幅約2.2m、前方部側面で幅6.5～8.5m、後円部で幅10～10.5mと規模が判明した。平成元年度には後円部の北側が調査され、周溝を確認した。

これまでの調査で周溝内から転落したと思われる葺石は確認していない。

### (2) 出土遺物 (第18図)

かつて、行人塚古墳は史跡和田岡古墳の5基の古墳の中で最も新しく中期中葉以降の古墳と解釈されていたが、埴輪が発見されていないこと等から、遡る可能性があることが指摘されている。

今回、吉岡大塚古墳の第5次調査の整理調査に合わせ、過去の調査によって周溝内から出土した遺物の抽出・実測を行った。弥生時代後期に位置づけられるもの、外面に煤が付着し煮炊きに使用されたもの、器形が復元できないもの、時期不明の小片を除外し、実測可能な土器を実測した。

83～90は、昭和57年度の調査で1区とした前方部の周溝から出土したもので、83・84が前方部北側、87～90が前端側の周溝からの出土である。

83は、口径16.4cmを測る二重口縁の壺で、外面を縦ハケ後、横ナデを施す。84～88・90は高坏である。85は、脚端部付近に3方の透かし孔がある。外面は坏部・脚部ともに縦のミガキが施される。86の脚は、外面に斜めの工具痕が残ることから、ハケ後にナデを行っている可能性がある。87の脚は、底径12.4cmを測り、外面に細かい縦ハケ、内面に粗いハケが施される。脚部上半に3方の透かし孔がある。88は接合部の直径3.1cmを測る高坏の脚で、3方に透かし孔がある。90の脚は、底径11.2cmを測り、端部付近で鋭く屈曲し端部は水平に近く開く。

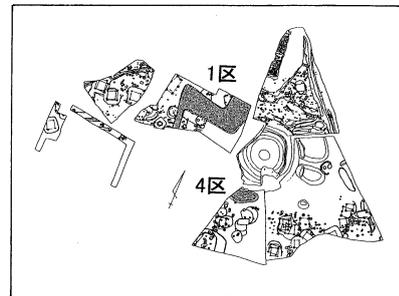
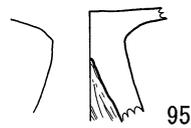
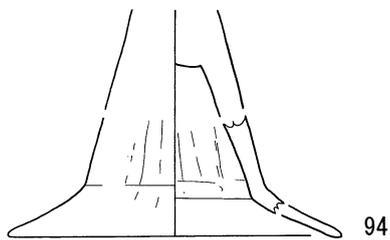
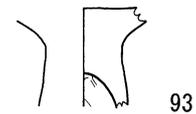
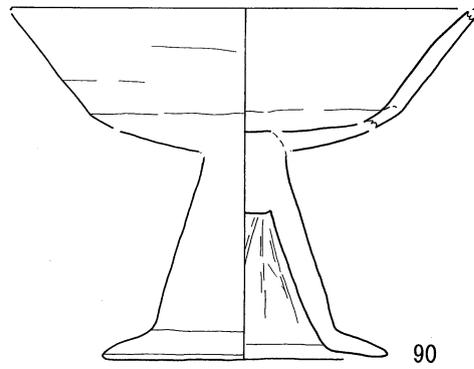
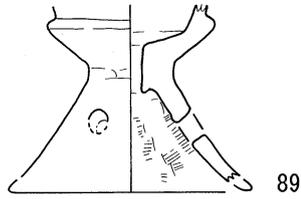
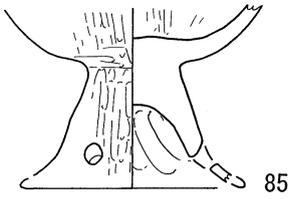
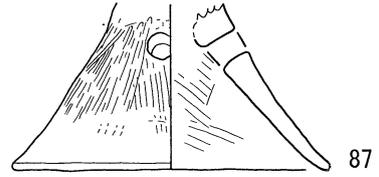
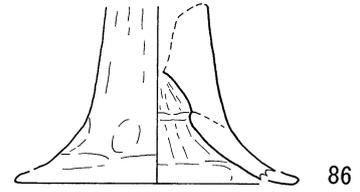
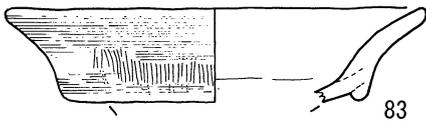
89の器台は、口縁端部と脚端部を欠損する。坏部の中央に直径1cmの穿孔があり、脚の上半に3方の透かし孔がある。坏部外面は横ミガキ、脚部外面は縦ミガキと考えられ、脚部内面は横ハケが施される。

91～95は、昭和57年度の調査で4区とした後円部南側の調査区から出土した遺物で、すべて高坏の脚部である。

91は、外面に細かい縦ハケを施した後、粗い横ハケを施す。残存部部分の下端に3方の透かし孔がある。93は接合部の直径3.0cm、95は接合部の直径2.8cmを測る。94は、鋭く屈曲する端部付近が残るだけである。

時期的な位置付けは、83～85・87～89・91が前期に、90・94が中期に位置づけられる。86・92・93・95は、判断材料を欠くため前期とも中期とも判断できない。

4区の後円部の周溝は他の遺構と切り合いがないため、出土遺物は古墳に伴うものと考えられる。一方、1区の前部部の周溝は複数の竪穴住居跡と切り合いがあり、掲載した土器は出土した位置と高さというデータを欠いていて、古墳に伴うとは言い切れない。なお、周溝内の出土遺物の中には、中期の各和金塚古墳・吉岡大塚古墳に伴う埴輪は含まれないし、須恵器も含まれていない。



第18図 行人塚古墳出土遺物実測図

## 第5章 まとめ

### (1) 第5次調査の成果

今回の調査は補足調査のため、面積等限定的であったが、古墳を復元するための貴重な資料が得られたと考える。トレンチごとに成果を記述する。

#### 1) 第10トレンチ

第3次調査の第4トレンチの調査で確認できなかった上段葺石の基底石を検出できた。これにより、上段葺石の基底石のレベルが、標高63.45mであることが判明した。後円部の他のトレンチで検出した基底石の標高は、南側の第1トレンチが63.40～63.45m、東側の第2トレンチが63.50～63.58m、北側の第3トレンチが63.49～63.55mを測り、第10トレンチで検出した基底石のレベルとは最大で13cmの高低差しかなく、極めて厳密に造られているといえる。

基底石の西側で検出した段は、約1.2mの幅で残存していた。本来は、後円部南側の第1トレンチ同様1.34mの幅で存在したと考えられる。

トレンチ西端で検出した集石は下段の葺石と考えられ、段の縁から前方部頂の平坦面までの範囲に存在したと推定される。

後円部東側の第2トレンチ、後円部北側の第3トレンチで確認した縦方向の区画石の検出が調査の主な目的であったが、確認できなかった。区画石は、すでに崩れ去ってしまったのか、トレンチとは別の場所に存在するのか、検討を要する。

#### 2) 第11トレンチ

前端部のコーナーはすでに削り取られていたが、前方部側面の裾を確認できた。昭和56年度に西側の茶畑で実施された中原遺跡の発掘調査によって吉岡大塚古墳の前端部の周溝が確認されているので、図面を合成することにより現在失われている前端部の周溝の復元が可能になる。

前方部側面の裾は、標高60.90m前後を測るが、東端の裾部分に断面が皿状を呈するくぼみがあり、標高60.59mを測る。このくぼみは、第1次調査のDトレンチでも確認されていて、墳丘から転落した葺石と埴輪が出土しているので、後世の攪乱によるものではなく古墳築造時のものであると考えられる。

後円部南側の第1トレンチと第1次調査で後円部の南西方向に設定されたBトレンチから検出された周溝底面のレベルは、このくぼむ部分の標高と近い値であり、後円部の周溝底面が前方部の墳丘寄りの周溝底面に繋がっている可能性がある。それ以外の前方部の周溝の底面は、一段高くなっている可能性がある。

前端部近くの墳丘は、現況、瓦や陶磁器が混じる小石が厚く積み重なっている。何らかの理由で墳丘が削り取られ、その後の畑の耕作で邪魔になった瓦や陶磁器、小石が廃棄されたものと考えられ、今後前端部の高さの復元が必要になる。

#### 3) 第12トレンチ

トレンチ北半の平坦な周溝底面が、ほぼ中央で南に傾斜し深くなる。深くなる部分は、トレンチの東端でトレンチ南端から約4.1m、西端で約3.3mを測る。第1次調査時に前方部北側の前端部から周溝外縁にかけて設定されたFトレンチで検出された周溝底面のレベルは標高61.2m前後を測り、今回検出された北半の平坦な周溝底面とほぼ同じレベルであり、平坦面が存在する可能性が高い。

トレンチ中央北寄りから検出された東西方向の集石は、周溝底面のレベルの変化点に位置することから古墳と関連すると考えたいが、遺構の時期・性格等は明らかではない。

## (2) 埴輪等

吉岡大塚古墳出土の埴輪については、第3章の「(2) 遺物」の中で概要を述べたが、和田岡古墳群の中では、吉岡大塚古墳と各和金塚古墳から埴輪が出土している。この2基の古墳は、各和金塚古墳が中期前葉、吉岡大塚古墳が中期中葉に位置づけられる。

吉岡大塚古墳の埴輪は、先行する各和金塚古墳の埴輪と比較すると、突帯はより高くなっている。朝顔形円筒埴輪は、頸部接合部に突帯が存在しないという共通点はあるが、肩の突帯は頸部により近くなり、頸部はより短く、口縁部はより外反する。

第3章では触れなかったが、吉岡大塚古墳からは、壺形埴輪と土師器の甕が出土している。壺形埴輪は、吉岡大塚古墳のほかに春林院古墳と瓢塚古墳で確認されている。春林院古墳は前期後葉～末、瓢塚古墳は前期末～中期初頭と考えられる。

吉岡大塚古墳の壺形埴輪は、第4トレンチJ-11区の段から1点、第6トレンチI-10区の墳丘斜面と裾から2点の合計3点が出土していて、これらは後円部の墳頂からの転落と考えられる。

土師器の甕は、第6トレンチI-10区の墳丘斜面から出土したもので、口縁部と体部下半が残存していた。出土地点から、墳頂方向からの転落と考えられ、外面に煤（炭化物）が付着していることから、使用済みであることがわかる。

外面に煤（炭化物）が付着した甕が、第1章の「(2) 歴史的環境」で記述した高田上ノ段遺跡内から発見された古墳の周溝からも出土している。古墳は、吉岡大塚古墳の南東約150mに位置し、周溝の幅1.25～1.55m、周溝の内側で直径10.5mを測る円墳と考えられる。甕は、古墳の周溝から出土し、一部に欠損はあるがほぼ完形であることから、古墳に伴う遺物と考えられ、時期は中期中葉に位置づけられる。同じ第1章の「(2) 歴史的環境」の中で触れた女高I遺跡から検出された方形周溝墓の周溝内から出土した甕にも煤（炭化物）が付着したものがあつた。周溝内からは、土器の他に砥石、石製模造品、ガラス玉が出土していて、これらは祭祀に使用されたと考えられる。市内の他の地域の古墳から使用済みの甕が出土したことはなく、今のところ和田岡古墳群周辺に限られている。

## (3) 今後の課題

吉岡大塚古墳からは、壺形埴輪、埴輪、土師器の甕が出土している。

壺形埴輪は、前期から和田岡古墳群の首長墓に採用された。壺形埴輪は在来的な色彩が濃いとされ、畿内型の埴輪が出土した浅間神社3号墳からは出土していない。埴輪は、中期から和田岡古墳群で採用されるが、浅間神社3号墳から出土した埴輪とは異なり、和田岡古墳群独特の形状と技法がみられる。土師器の甕を使用した祭祀は、いつ頃から始まるか明らかではないが、中期の和田岡古墳群周辺の小古墳等で行われていたと考えられる。

在来的な壺形埴輪、変容した埴輪、土師器の甕を使用した在地の祭祀がみられるのは、今のところ和田岡古墳群の中でも吉岡大塚古墳だけである。これが、中期中葉という時期によるものか、それとも各和金塚古墳から受け継いだ祭祀の形なのか、各和金塚古墳の出土遺物を今後検討することによって解明できると考える。

## 参考文献

- 『吉岡大塚古墳測量調査報告書』 掛川市教育委員会 1980年
- 『史跡和田岡古墳群 吉岡大塚古墳 第2次・3次・4次発掘調査報告書』 掛川市教育委員会 2011年
- 『春林院古墳の研究』 静岡大学人文学部考古学研究室 2011年

出土遺物観察表

吉岡大塚古墳第5次調査出土遺物【第8図・第9図】

No.	種別	器種	出土位置	口径	器径	器高	残存率	色調	備考
1	埴輪	円筒	第10トレンチJ-11区	27.4	—	現14.9	1/7	にぶい黄橙色	黒斑あり
2	埴輪	円筒	第10トレンチI-11区	24.0	—	現5.5	1/9	浅黄橙色	
3	埴輪	円筒	第10トレンチJ-11区	—	—	現10.0	10cm×13cm	浅黄橙色	
4	埴輪	—	第10トレンチI-11区	—	—	現6.9	7cm×12cm	橙色(突帯)浅黄橙色	
5	埴輪	—	第10トレンチI-11区	—	—	現6.7	7cm×10cm	にぶい黄橙色	
6	埴輪	—	第10トレンチI-11区	—	—	—	3cm×8.5cm	浅黄橙色	
7	埴輪	—	第10トレンチJ-11区	—	—	—	5cm×7.5cm	浅黄橙色(突帯)橙色	
8	埴輪	—	第10トレンチJ-11区	底16.0	—	現7.1	1/10	にぶい橙色	
9	埴輪	—	第10トレンチJ-11区	底15.6	—	現4.9	1/6	にぶい橙色	黒斑あり
10	埴輪	朝顔形円筒	第10トレンチI-11区	—	—	—	3cm×5.5cm	浅黄橙色	
11	須恵器	壺?	第11トレンチG-14区	—	—	—	5cm×3.5cm	黒色	
12	縄文土器	深鉢	第10トレンチJ-11区	—	—	—	3.5cm×5cm	灰黄褐色	
13	縄文土器	深鉢	第11トレンチF-14区	—	—	—	4cm×4cm	暗赤褐色	
14	縄文土器	深鉢	第11トレンチF-13区	—	—	—	4cm×4.5cm	暗赤褐色	
15	縄文土器	深鉢	表採	—	—	—	5cm×4cm	暗赤褐色	
16	石器	打製石斧	第11トレンチ表採	—	—	—	8.6cm×6.8cm		泥岩
17	石器	打製石斧	第11トレンチG-14区	—	—	—	10.6cm×5.2cm		緑泥片岩
18	石器	打製石斧	前方部西側表採	—	—	—	8.3cm×5.5cm		泥岩
19	灰釉陶器	甕	第11トレンチ表採	—	—	—	5cm×3.5cm	灰白色	
20	土師器	甑	第11トレンチF-13区	—	—	—	4cm×4.1cm	明赤褐色	

吉岡大塚古墳第1次調査出土遺物【第10図】

No.	種別	器種	出土位置	口径	器径	器高	残存率	色調	備考
21	埴輪	円筒	Aトレンチ(後円部東側)	26.0	—	現7.7	1/14	明黄褐色	
22	埴輪	円筒	Dトレンチ(前方部南側)	—	—	現12.4	1/12	にぶい褐色	
23	埴輪	—	Hトレンチ(後円部北側)	—	—	現6.8	1/13	浅黄橙色	
24	埴輪	—	Hトレンチ(後円部北側)	—	—	現5.4	1/10	浅黄橙色	
25	埴輪	朝顔形円筒	不明	—	—	現15.5	1/9	浅黄橙色	
26	埴輪	—	Aトレンチ(後円部東側)	底16.4	—	現6.7	1/5	浅黄橙色	黒斑あり
27	埴輪	—	Bトレンチ(後円部南側)	底16.0	—	現6.4	1/7	浅黄橙色	
28	埴輪	朝顔形円筒	Aトレンチ(後円部東側)	34.0	—	現3.8	1/7	橙色	黒斑あり

行人塚古墳出土遺物【第18図】

No.	種別	器種	出土位置	口径	器径	器高	残存率	色調	備考
83	土師器	壺	1区周溝(前方部北側)	16.4	—	現3.7	1/12	黄橙色	二重口縁
84	土師器	高坏	1区周溝(前方部北側)	—	—	現4.6	口縁部欠損	黄褐色	
85	土師器	高坏	1区周溝	—	—	現7.1	坏部1/3、脚端部欠損	橙色	
86	土師器	高坏	1区周溝	—	—	現6.8	1/4	橙色	
87	土師器	高坏	1区周溝(前端部)	底12.4	—	現6.6	脚端部3/4欠損	明黄褐色	
88	土師器	高坏	1区周溝(前端部)	—	—	現4.4	脚上半完存	浅黄色	
89	土師器	器台	1区周溝(前端部)	—	—	現7.1	坏部底部・脚上半完存	橙色	
90	土師器	高坏	1区周溝(前端部)	底11.2	—	脚8.9	脚端部1/16残存	橙色	
91	土師器	高坏	4区周溝(後円部南側)	—	—	現2.5	脚上半完存	にぶい黄橙色	
92	土師器	高坏	4区周溝(後円部南側)	—	—	現3.6	1/5	橙色	
93	土師器	高坏	4区周溝(後円部南側)	—	—	現4.0	接合部完存	橙色	
94	土師器	高坏	4区周溝(後円部南側)	—	—	現3.6	1/9	橙色	
95	土師器	高坏	4区周溝(後円部南側)	—	—	現4.5	接合部完存	明黄褐色	

法量の単位は、cmである。

器種・法量の「—」は、不明を表す。

「口径」欄の「底」は底部径、「器高」欄の「現」は現存値であることを示す。

残存率は、破片は割合か大きさを示し、完形に近いものは欠損部位を示す。

色調は、『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に拠る。

# 版 图





全景（西から）

PL.2



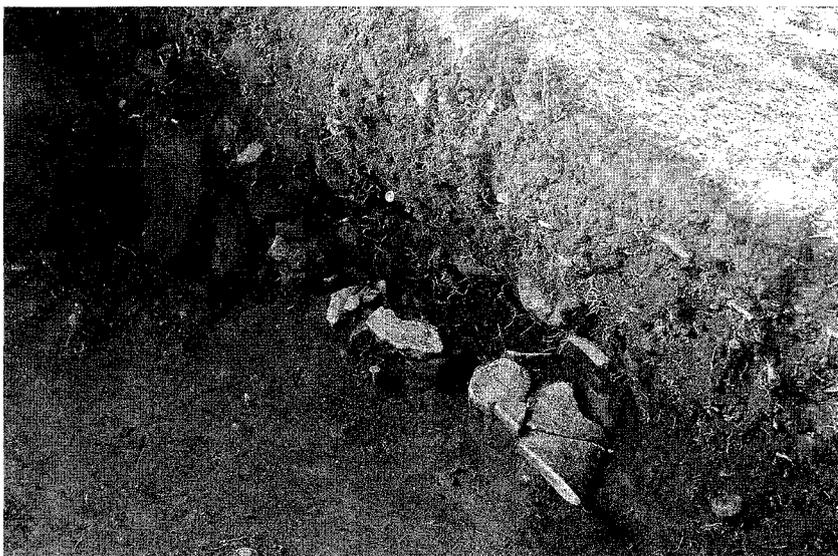
墳丘（南西から）



墳丘（西から）



第10トレンチ 後円部西側完掘状況（西から）



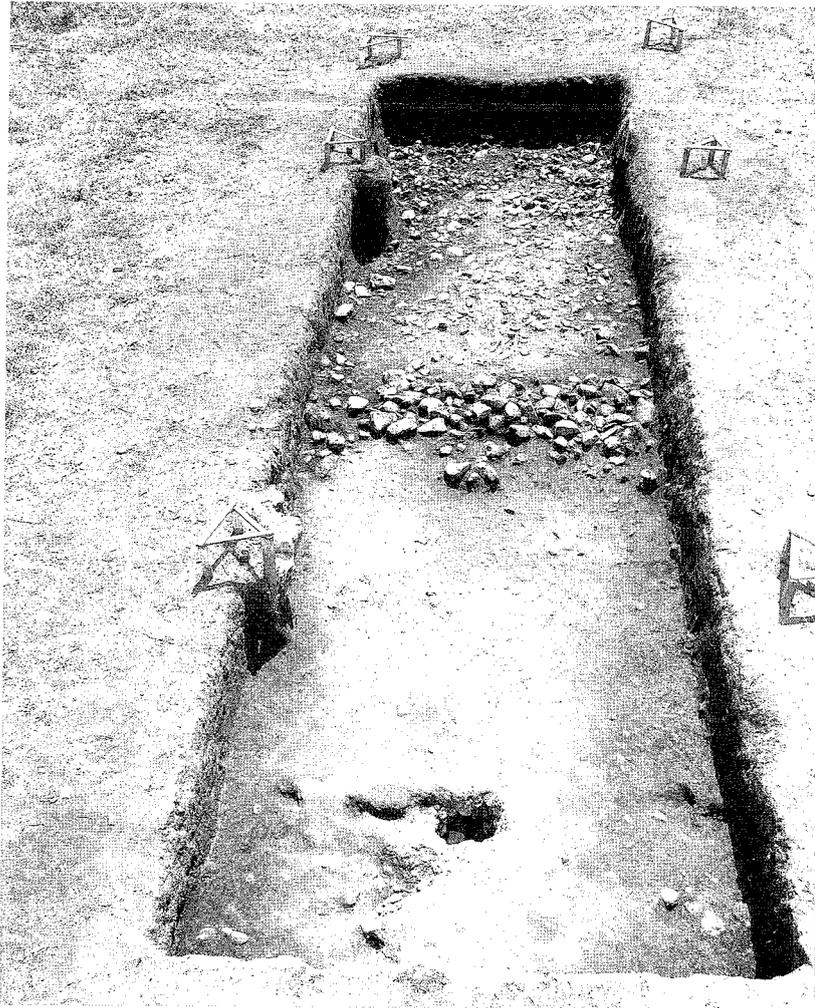
第10トレンチ 埴輪出土状況（西から）



第11トレンチ 前方部南西完掘状況（南から）



第11トレンチ 前方部南西完掘状況（西から）



第12トレンチ くびれ部北側周溝完掘状況（北から）



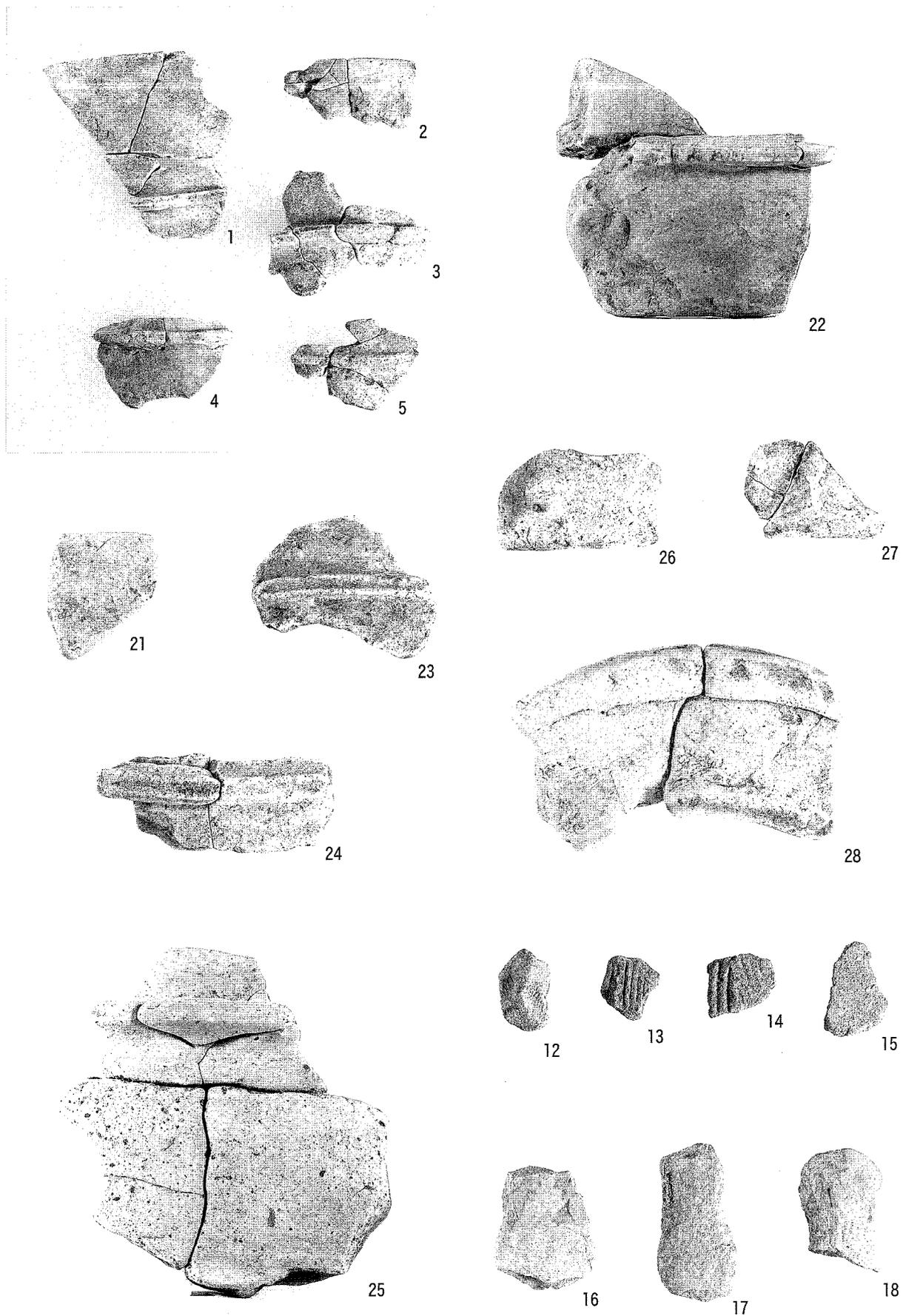
第12トレンチ くびれ部北側周溝完掘状況（西から）

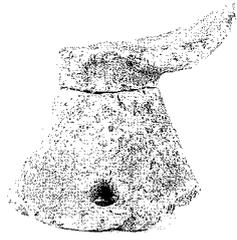


第12トレンチ 周溝内集石検出状況（西から）

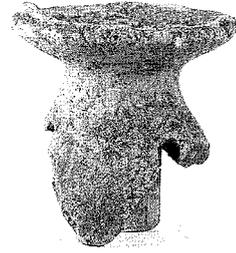


第12トレンチ 周溝内集石断ち割り状況（西から）

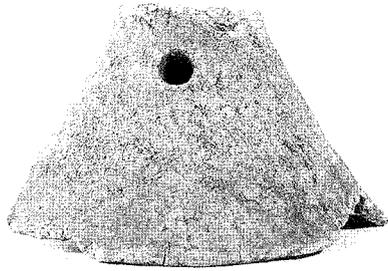




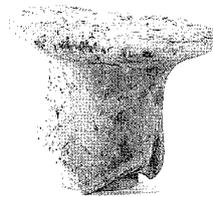
85



89



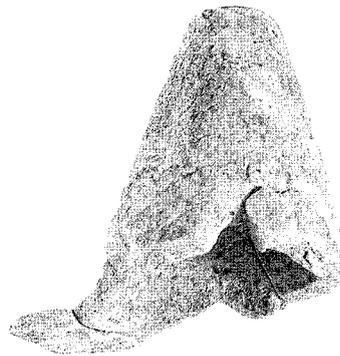
87



93



91



90

## 報告書抄録

ふりがな	しせきわだおかこふんぐん よしおかおおつかこふん							
書名	史跡和田岡古墳群 吉岡大塚古墳							
副書名	第5次発掘調査報告書							
編著者名	井村広巳							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1							
発行年月日	西暦2013年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしおかおおつかこふん 吉岡大塚古墳	しずおかけんかけがわしたかだ 静岡県掛川市高田	22213	K-229	34度 47分 52秒	137度 56分 47秒	2011年7月 ～ 2011年11月	118㎡	史跡整備に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
吉岡大塚古墳	古墳	縄文時代			土器、石器			
		古墳時代	前方後円墳		埴輪、須恵器			
要約	<p>第10トレンチ 葺石裾、墳丘の角度を確認。</p> <p>第11トレンチ 南側前方部裾の一部を確認。</p> <p>第12トレンチ 周溝は、前方部の方向に緩やかに傾斜する。また前方部周溝より後円部周溝が深くなる。</p> <p>周溝内に集石を確認。</p>							

**史跡和田岡古墳群  
吉岡大塚古墳**

**第5次発掘調査報告書**

2013年3月29日

編集・発行 掛川市教育委員会  
静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1  
TEL 0537-21-1158  
印刷 松本印刷株式会社 袋井営業所  
静岡県袋井市新屋4丁目5-2  
TEL 0538-43-6300